ファイアーエムブレム～時空の絆～

エラクゥス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファイアーエムブレム～時空の絆～

【Ｎコード】

Ｎ７３７０Ｕ

【作者名】

エラクゥス

【あらすじ】

何処にでもいる高３と高２の兄弟が謎の３ＤＳを介してファイアーエムブレム暁の女神のエンディング後のテリウス大陸へ飛ばされた。同時期、紋章の謎のマルスとシーダ、封印の剣のロイとリリーナもテリウス大陸へ飛ばされた。彼らは共に旅立つ前のアイクとセネリオに会う。本来出会うはずのなかった主人公たちと高校生の兄弟が出会う時、新たな物語が紡ぎ出される。

プロローグ～異世界からの勧誘～地球ｓｉｄｅ（前書き）

初投稿です。文才は無いので、そこら辺ご容赦ください。
マルス、シーダ、ロイ、リリーナ、アイク、セネリオを中心人物として展開していきますので、よろしくお願いします。

プロローグ～異世界からの勧誘～地球ｓｉｄｅ

ここはとある住宅街の一角。

東京の街の不動産屋を叩き歩けばごまんとありそうな築5年、高さ7階のなんの変哲もないマンションの一室である。

日が完全に沈んでからすでに8時間たった今でも明かりが煌々とついている。ところで、みんなも知っている通り、日没から8時間後ということは、今は午前2時ごろとなる。

別に夜中の2時に明かりがついていることは別に珍しいことでも無いし、問題のあることではない

問題はここの住人にあった。

？「のあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？またしてもグラウアーにやられたぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

？2「兄貴うるせぇよ今何時だと思ってんだ」

兄「おのれグラウアーめ、俺に一体何の恨みがあるっていうんだ！こんなのチートだチート！」

弟「そりゃあんな不味い動かし方したらやられるに決まってるじゃないか。」

夜中に叫び声をあげる傍迷惑なこの家の長男（水淵　昴大）

一方、冷静にツッコミを入れているのがこの家の次男（水淵　繋）

彼らがやっているのがファイアーエムブレム新紋章の謎である。

昴「くそ、これで・・・」

繋「１４６回目」

昴「そうそう１４６回目のゲームオーバーだ」

繋「やられ過ぎだよ、これノーマルだろ？」

補足しておくと、昴大はかなりファイアーエムブレムが下手なのだ。

繋「動かし方が不用意なんだよ。いくらＨＰ高くても、闇魔導士や魔竜に単騎突撃したらかてるもんも勝てないよ。」

昴「そんなこと言ったって・・・ってあぁぁ！」

昴大の叫び声とともにマルスが魔竜のブレスに包まれる

マルス「みんな・・・すまない・・・」

シーダ「ああ、マルス様氏んでしまうなんて・・・」

何処か盛大に間違っているかもしれないがまあ気にしないでおこう、

そして何度見たかしれないＧＡＭＥＯＶＥＲの文字

昴大は盛大な溜息とともにＤＳを閉じた。

そして、蚊のなくような声で昴は呟いた。
昂「はあ・・・ファイアーエムブレムの中に入ったら俺、もう少しうまくやれると思うんだけどなぁ」

繋「どっちにしろ結果は変わらないと思うし、ゲームの中に入れねぇよ」
繋が笑い飛ばすように言い、昂大もそれを肯定するが何か妙な違和感を感じがしていることに気がついた。

昂大「あれ？ＤＳは？」

昂大も辺りを見回してみるが閉じて置いた場所にＤＳは見当たらない。

昂大「ちょっとさがしてくれ。」

繋はしぶしぶ了解し、昂大と辺りを捜索し始めたが１５分経っても見つからなかった。

昂大「何処置いたっけな、全く」

そうこうしているうちに繋は休憩しにリビングに行ってしまった。
そしてしばらくすると、繋が駆け足で戻ってきた

繋「お～いあったぜ、リビングのテーブルの上に」
昂「リビング？テーブルの上？俺はそんなところに持ってってないぜ。」
繋「あったんだからしょうがないじゃないか、ただ・・」
昂「ただ・・？」

繋が口ごもる

繋「なんか違うだよな。」

昂「違う？」

繋「とりあえず来てくれ」

昂大は？を３つぐらい浮かべながらリビングにむかった。」

昂大「何だこれは・・・」

リビングに着いた昂大は絶句していた。

そこにあったのは昂大たちの持っていた初期モデルのＤＳではない。

そこにあったのは紛れもなく３ＤＳだった

繋「何だかよく分からんが、やったな！これであのＤＳを探す必要性もなくなったぜ！」

昂「感動のポイントはそっちかよ！ってそんなことはどうでもいい！それ以前に何でこんなところに３ＤＳがあるのかを考えてみろ。何で初期型のＤＳが未だ現役のこの家にいきなり３ＤＳがコンニチハしてるのはおかしいだろ。しかも、さっきまでなかったぞ。」

繋「細かいことは気にしない気にしない、まあいきなり現れたのは

不思議だけど。」

昂「気にしろよ！」

しばらくたって、冷静に考え出した昂大はあることに気が付いた

昂「なあ、この３ＤＳ何色に見える？」

繋「ん？そんなのみればわかるだろ？」

繋は当然のように言い放った。

繋「黄色だろ？」

昂「３ＤＳに黄色など存在しない」

昂大の言う通り、３ＤＳに黄色はまだない（２０１１，７，９現在）

繋「じゃあこれは何なんだ？」

そう言って謎の３ＤＳを見た瞬間

？「我を開けよ」

昂＆ａｍｐ；繋「？？！！」

耳の中で何か声が聞こえたのだ。

昂「わ、我って何だ」
繋「た、たぶんその３ＤＳのことじゃない？」
昂「なんで３ＤＳが喋るんだ！」
繋「知るわけないでしょ、とりあえず開けたら？」
昂大は少々ビビりながらも、３ＤＳを開けた。
すると、３ＤＳから文字が現れた。
ＳＤ「行きたいかい？」

繋「はい、か、いいえで答えるようになってるよ」
昂「何だよ何処に行くって言うんだ」

すると続きが現れた。

ＳＤ「ファイアーエムブレムの世界」

繋「だってさ、どうする？」
昂「そうだな、って冗談だろこれ」
繋「冗談だろうがそうでなかろうがとりあえず答えよう」
昂「そうだな、行ってみたい気はするな。」

昂大は、「はい」を押す

ＳＤ「それがお前たちの答えか、いいだろう。行かせてやろう。ただし既存のストーリーを楽しむだけでは満足できまい。ファイアー

エムブレムの主人公を数人集めて新たなストーリーをつくってやる。
では行くぞ！

メッセージが消滅した瞬間からいきなり地震が発生した。

昂「お、おい、まじかよ、本当にファイアーエムブレムの世界に飛ばされるのかよ？」

繋「そうみたいだね、何か大変なことになってきたね、まあどうにかなるでしょ。

昂「一人で妙に落ち着いてるんじゃねぇー？」

その瞬間、二人の意識は暗転した。

プロローグ～異世界からの勧誘～地球ｓｉｄｅ（後書き）

これから頑張りますので、よろしくお願いします。
次はマルスたちの世界です。

プロローグ～異世界からの勧誘～マルスｓｉｄｅ（前書き）

続いて、マルスｓｉｄｅのプロローグです。

プロローグ～異世界からの勧誘～マルスside

？「マルス様、おはようございます。」
青い髪の美女がマルスに朝の挨拶をする。

マルス「おはようシーダ。」
今日もいつも通りの笑顔でいるこの新婚夫婦はアカネイア大陸に平和をもたらした、英雄マルスとその妻シーダである。

二人は以前から婚約していたが大陸の動乱に巻き込まれて、なかなか、式を挙げられずにいたが、三ヶ月前に世界に平和をもたらしたことで、マルスは王に登りつめ、堂々と結婚式を挙げることができた。
二人はそれから、幸せな結婚生活を送っていた。

そんなある日のことである。

マルス「どうしたんだろう、何だか王宮内がなんだか騒がしいな。」

ガチャ　　（ドアが開く）

ジェイガン「失礼します、マルス様」

マルス「ちょうど良かったよジェイガン。何だか騒がしいけど何かあったのかい？」

ジェイガン「伺いましたのはその件でございます。こちらをご覧ください。」

そう言って、ジェイガンはあるものを取り出した。

マルス「何だい、これは？」

ジェイガン「私にもさっぱりでございます。ただ、一つだけ言えるのはとても精巧に造られていて、人が造ったものとはおもえません。」

ガチャ（シーダが入ってくる）

シーダ「マルス様、昼食の準備ができておりますよ・・・？何ですかそれは？

シーダはものを見て首をかしげる

マルス「ジェイガンが拾ってきたんだ、ところでジェイガン、これはどこに落ちていたんだい？」

ジェイガン「マルス様の部屋の前でございます。朝に通りかかった時に見つけたのでございます。それを配下の者に見せたら大騒ぎになりましてな、今取り返してマルス様のところに持ってきたのです。」

マルス「僕の部屋の前に”それ”が。」

マルスは目の前にある”それ”に目を移した。

緑色に塗られた”それ”に。

すると、目を移した瞬間に”それ”は起動した。

？「聞こえてるかい？」

マルス&シーダ「？」
ジェイガン「どうかしましたか？」
ジェイガンはマルスとシーダが驚いたことに疑問を投げかけた？」
マルス「ジェイガンはなにも聞こえなかったのかい？」
ジェイガン「いえ、なにも」
ジェイガンには何も聞こえなかったようだが、謎の声は続ける。
？「我を開けよ」
マルス「開ける？」
シーダ「これのことではないですか？」
シーダであるそう言って”それ”を開いた　　すると
？「英雄マルスよ貴殿は三度世界を救う覚悟があるか。」
その文書がその画面に表示されるやいなやジェイガンは”それ”を食い入るように見つめた
ジェイガン「これは・・・？」
マルスもしばらく戸惑っていたが、やがて次の文章が表示された。
？「我々の世界は今現在、危機に瀕している、貴殿の力が必要だ。」
そして、最後に一文表示される。

？「助けてくれ」

マルスは戸惑いながらも、やがてはっきりとこう言った。

マルス「やっと戦いが終わったからゆっくりしたいと思ってたけど、僕はやっぱり誰かが困っているのを見過ごせない性格なんだ。」

そして、こう宣言した。

マルス「助けるよ、君を、君の世界を。」

しばらくして”それ”から新たな文章が表示された。

？「ありがとう」

すると、表示されたとたんに地震が発生した

マルス「うっ・・・わっ・・・！」

シーダ「マルス様！」

ジェイガン「マルス様！」

その後、マルスともう一人の視界は暗転した、」

プロローグ～異世界からの勧誘～マルスｓｉｄｅ（後書き）

今回も見てくださってありがとうございます。

次はロイｓｉｄｅです。

プロローグ～異世界からの勧誘～ロイｓｉｄｅ～（前書き）

どうも！今日はロイｓｉｄｅです。

プロローグ～異世界からの勧誘～ロイside～

ロイ「また、あの夢を見るんだろうか。」

エレブ大陸のフェレ侯爵となったロイは一週間程前から悪夢に悩まされていた。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

見たことの無い、暗く迷路のような場所をロイは息を切らしながら走っていた。

ロイ「リリーナ何処だ！」

？「この場所を一人で行動するのは危険だ、この場所には赤竜もいるみたいだからね。急がないと大変なことになるよ！」

ロイ「アイクたちと合流していればいいんだけど。」

すると、地面にうずくまっているリリーナを発見する

ロイ「リリーナっ・・・」

リリーナの後ろに今にも火を吐きそうな赤竜がいることにロイは息を詰まらせた。

（あぁ、やめろ、またこの夢か）

赤竜が火を吐くために息を吸い始める

（やめろ、やめろ？）

そんなロイの思いは無情にも届かず赤竜は火を吐く準備を完了する。

ロイ＆ａｍｐ；？「やめろぉぉぉぉぉぉぉ？？？」

その瞬間に赤竜の火のブレスにリリーナは包まれた。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

ロイ「はぁっ！はぁっ！はぁっ！」

ロイは体中が冷や汗でベチャベチャになっていた。

ロイ「またっ、この夢か」

しばらくして落ち着いたロイは考え始める

ロイ「この一週間、ずっとこの夢だ。これは何かの予兆なのか？近々リリーナに何かが起きるのか？」

ロイがしばらく考えていると

使用人「ロイ様、おはようございます。朝食のご用意が出来ました。
ロイ「すぐ行くよ。」

朝食後、思案していたロイのもとにランスがやって来た。
ランス「ロイ様、オスティアからリリーナ様がお越しです。」
ロイ「リリーナが？」

ロイは急に椅子から立ち上がって驚いた。リリーナがフェレに来ることをロイはまったく知らなかった。

ロイ「すぐ行くと伝えてくれ。」

数分後、ロイはリリーナがいきなり訪問したことに疑問を抱きつつも階段を駆け下りた。

リリーナ「ロイ!」
ロイ「リリーナ、どうしたんだい、いきなり来るなんて。」

ロイはリリーナと会えたことに喜びながらも疑問をぶつけた。

リリーナ「実はね、見てもらいたい物があるの、とりあえずロイの部屋行きましょう。」

リリーナはロイの部屋に着くと、そのみせたい物を取り出した。」

ロイ「何だいこれ?」
リリーナ「分からないわ、ただ、私の部屋の前に落ちていた”この子”がロイに会いたいって言うから連れて来たの。」
ロイ「”この子”?」

ロイがその意味を理解出来ないでいると

?「やぁ、やっと会えたねロイ。」
ロイ「?」

ロイはいきなり喋り出した”緑色”に塗られた物体に度肝を抜かれた。

ロイ「しゃ・・・喋った！」
リリーナ「そうなの、私も驚いたわ。」

ロイは、戸惑いながらも質問をぶつけた。

ロイ「それで、僕に何で会いたかったの？」
？「あぁ、とりあえず説明すると・・・。」

すると、説明を始めようとした緑色の謎の物体がいきなり思いつめたかのように黙ってしまった。

？「・・・・・・・・。」

やがて開き直ったかのやうに一言、さらっと言いのけた。

？「まっ！四の五の言わずについて来て！」
ロイリリ「はぁ？」

すると、突然地面が揺れ始める

ロイ「うわわ、ちょっと！何処へ連れて行く気だい！」
？「まっ、気にしない、気にしない。」
ロイ「気にするよ！」
？「さぁ、レッツゴー！」

謎の物体は何故か妙にノリがいい

ロイリリ「何でこ～なるの！」

二人の意識は暗転した。

プロローグ～異世界からの勧誘～ロイｓｉｄｅ～（後書き）

次回、プロローグ最終章です。　アイクｓｉｄｅです。

プロローグ～異世界からの勧誘～アイクｓｉｄｅ（前書き）

どうも、プロローグのアイクｓｉｄｅです。

長いプロローグでした。

プロローグ～異世界からの勧誘～アイクｓｉｄｅ

？「アイクさんお疲れ様です！」

蒸し暑い工事現場に大きな声が響く

アイク「おう、じゃあ俺は傭兵団の砦に帰るから、後は任せたぞ。」
作業員「はい！任せてください。」

テリウス大陸の動乱から早三ヶ月。戦乱で荒れ果てた国の復興が進む中、アイクたち傭兵団はクリミアの復興に尽力していた。今日もアイクは復興の手伝いを終えて、砦に帰っていた。

アイク「帰ったぞ。」
ミスト「お兄ちゃんおかえり、セネリオ君が待ってるよ。」
アイク「セネリオが？分かった、すぐ行く。」

アイクはセネリオが待っているという部屋へ向った。

セネリオ「お疲れ様ですアイク、わざわざ呼び出すようなまねをしてすみません。

アイクが部屋に着くとセネリオが何かに覆いかぶさるような格好をして待っていた。

アイク「いや、あんなの俺には軽い仕事さ。」
セネリオ「今更ですが、あなたにとって、一時間で丸太五十本を森から工事現場に運び出す労働は軽い仕事なのですか。相変わらず、

あなたの体力の底なしさには驚かされます。」

セネリオが呆れたような顔をしていると、アイクが口を開いた。

アイク「ところでセネリオ、俺に話ってなんだ？」

セネリオ「そのこと何ですが、とりあえずこれを見てください。

そう言ってセネリオは姿勢を元に戻し、さっきまで体を使って隠していたものをアイクな前に差し出した。

アイク「なんだ、これ？」

セネリオ「知らないうちに、僕のバッグの中に入ってたんです。不思議ものですね、まるでバッグの中に突然現れたみたいなんです。

アイク「突然現れたねぇ・・・。」

アイクはその謎の物体に触ろうとしたその瞬間

ミスト「お兄ちゃん、セネリオ君、お茶入れたよ～ってそれなに？」

いきなりミストが入って来て、謎の物体をみてしまったため、セネリオは深く溜息をついた

セネリオ「出来るならアイク以外には見せたくなかったのですが、仕方ありませんね。」

ミストは近づいてよく見るために走って来たが、その途中で盛大にずっこけた。

ちなみにお茶を両手に抱えた状態で

バッシャバリンとコップの割れる音とお茶のかかる滑稽な音がした。
ミストが恐る恐る顔を上げるとそこには、床に落ちているコップの破片と思いっきりお茶を浴びたアイクとセネリオがいた。

ミスト「あぁ～！お兄ちゃん、セネリオ君、ごめんなさい！」

セネリオが”やっちまったな”と呆れたような顔をしていると、アイクが口についていた僅かなお茶をなめて、何やら感心したような顔をしていた。

アイク「ミスト、前よりお茶美味くなってるぞ。」
ミスト「本当？お兄ちゃんありがとう！」

セネリオが「お茶ぶちまけられた感想がそれですか」などと心の中でツッコミを入れていると、ふと、あることに気が付いた。

セネリオ「ああっ！」

セネリオが珍しく素っ頓狂な声をあげたので、アイクとミストがセネリオの視線の先を確認すると、謎の物体がお茶に浸かっていた。

アイク「し、しまった、お茶に完全に浸かっちまっている！大丈夫か？」
セネリオ「分かりませんが、さっさとお茶から引き上げましょう。」
ミスト「うぅ・・・ごめんなさい・・・。」

しばらくして、アイクが謎の物体を拭いていると、あることに気が付いた。

アイク「ん？おい、これ開くぞ。」
セネリオ「おや、本当ですね、気が付きませんでした。」

アイクがその”黄色い”謎の物体を開けると。

？「やあ、はじめましてアイク。」
アイク&セネリオ「！！」

謎の物体の画面に文章が現れた。

？「いや、蒼炎の勇者アイクと言った方がいいかな。」
アイク「そんなことはどうでもいい、お前は誰だ。」

アイクが問いかけると次の文章が現れた。

？「それは後で言うよ、それより君に聞きたいことがある。」

しばらくの沈黙の後、その質問は現れた。

？「君は女神アスタルテを倒して、これで戦いが終わった、なんて思ったんじゃないだろうね。」

アイク「何！？」

アイクはいきなりの質問に戸惑う。

？「あれは始まりなのさ、これから起こる動乱のね。まぁ本来、動乱は当分起こるはずは無かったんだけどね。」

アイク「ちょっと待て、どういうことだ！」

？「答えは自分で確かめてみたら？」

アイクがどういうことか分からないでいると、やがて謎の物体が思い出したかのように喋り始めた。

？「そうそう、忘れるところだったよ。僕の名前が知りたいんだったっけ？」

謎の物体はやがて自分の名前を画面に表示させた。

？「僕の名前はＳＤ、新たな物語を紡ぎ出すものさ。」

アイク「Ｓ・・Ｄ・・。」

しばらくの後、ＳＤはこう切り出した。

ＳＤ「さて、最後に言っとくよ。とりあえず、いつも修行してた森に行ってみな、君がこれからの物語に必要とする人たちを集めておいたよ。六人いるから、ちゃんと集めろよ。」

そして、ＳＤは最後にこう言った。

ＳＤ「じゃあ、後は頑張れよ！」

アイク「あ、ちょっと待て！まだ聞きたいことが・・・。」
アイクがそう叫んだ時、既に画面は暗くなっていた。
セネリオ「なんだったんでしょうね。」
アイク「今頃登場かよ、さっきまでなにしてたんだよ。」
セネリオ「ずっと隣で見てましたけど？」
アイクがそれなら少しは会話に参加しろよと思っていると。
セネリオ「ではアイク、行きましょうか。」
アイク「何処へだよ。」
するとセネリオは当然といった顔で
セネリオ「何処へってさっき言ってた森ですよ。さっきＳＤの話、何だか気になるんです。」
アイク「分かった、行こう。」
そう言って二人は駆け出した。

プロローグ～異世界からの勧誘～アイクｓｉｄｅ（後書き）

これにてプロローグは終了です。

次回から本編に突入します。これからもよろしくお願いします。

第一話～にわか武士の襲来～（前書き）

どうも、本編のスタートです。

これからもよろしくお願いします。

第一話～にわか武士の襲来～

ＳＤ「ふう、アイクにはちょっと嘘ついちゃったな。」

ある場所でＳＤは呟いていた。

ＳＤ「六人全員僕が集めたような言い方したけど、直々に声かけたのは二人だけなんだよな。まあ、アイクたちが困る訳じゃないから別にいいや。それにしても相変わらず＜あいつら＞は僕の邪魔をしたいみたいだけど、僕にとっても都合が良かったし利用させてもらったよ。それにしても・・・。」

ＳＤ「どうして・・・、あいつらは僕の邪魔をするんだ・・・。」

何故かその言葉だけＳＤの声がやけに悲しく聞こえた。

一方その頃、昂大たちはというと。

昂「うぅ・・・ここ何処だよ・・・。」

繋「森・・・だね。」

昂「なんで、こんなことになったんだよ！」

地球から何処かの森にぶっ飛ばされて、単純に言うと舞妓・・・いや、迷子になっていた」

繋「ここが何処か知らないけど、とりあえず森を抜けよう、何か分

かるかもしれない。」
昂「そうだな、さっさと行こうぜ。」
それからしばらく歩いていると、茂みの中から誰かが出てきた。
？「お前らが、昂大&繋太か。」
昂「？・・・えぇ、P&Gでも、Tiger&Bunnyでも、セブン&アイホールディングスでもなく、僕たちは昂大と繋太ですけど。」
何やら物騒な格好をした男が自分たちの名前を知っていたので、二人は身をたじろいてしまったがところへ男が開口一番。
男「お命頂戴つかまつりまする！」
そう言って男が斬りかかってきた
昂&繋「なんで、武士語やねん？」
そう言って、１８０度方向転換して逃げ出した。
１５分後
昂「あいつ、まだ追いかけてきやがる！」
繋「だいたい、ここはファイアーエムブレムの世界だろ？何で、にわか武士が出て来るんだよ！」
にわか武士は未だに日本刀片手に追いかけて来るが、追走の手を緩める様子はない。二人はたまらず叫んだ。

昂＆ａｍｐ；繋「なんで、こ～なるの！」

さらに１０分後

昂「うぅ～もうダメだ～。」
繋「さすがにもうムリ。」

二人は体力の限界で倒れこんでしまった。しかし、にわか武士はどんどん迫って来る。二人が覚悟したその時。」

？「サンダー！」

声と共に、にわか武士を雷撃が貫いた。

昂「サ、サンダー・・・やっぱりここはファイアーエムブレムの世界か、でも一体誰が・・・。」
？「大丈夫ですか？」

二人は声の主の方に振り向いた、そこには、以前、見たことのある人物が立っていた。

昂＆ａｍｐ；繋「リ・・・リリーナ・・・。」
リリーナ「あれ？何で私の名前知ってるの？」
昂「い、いや、これには深い事情が・・・。と、ところで、貴女は何故ここに？」

するとリリーナは困ったような顔をしながら答えだした。

リリーナ「うーん、何故と言われてもねえ、”この子”に連れてこられたのよ。」

そう言って、リリーナはおもむろに緑色の物体を取り出した。それは間違いなく

昂＆ａｍｐ；繋「３ＤＳ！！」

リリーナ「あれ、あなたたちこれが何か知ってるの？」

昂大と繋太は同時にポケットの中を探り始めた。

昂「これだ！」

昂大はポケットの一つに入っていた黄色い３ＤＳを取り出した。

僕たちもこれに連れて来られたんです。

リリーナが驚いた顔をしてやがてこう呟いた。

リリーナ「ということは、ここは私たちの世界ではない・・・？」

繋「異世界ということになるね。」

リリーナはずいぶんとショックを受けている様子だったが、しばらく経つと落ち着いてきた。

昂「自己紹介がまだだったね、僕は水淵昂大。」

繋「僕は水淵繋。よろしく。」

リリーナ「私はリリーナよ、よろしくね。」

しばらくして、リリーナは突然大事なことを思い出した。

リリーナ「いっけない、ロイを探してるんだった！」
昂「ロイを探してるんだったら、僕たちも手伝いますよ。」
リリーナ「いいの？あ、でも武器持ってないんじゃ・・・。」

そういえば、昂大たちは武器となりそうな物を持ってなかった。すると、昂大が辺りを見回した時にある物に目が留まった。

昂「それじゃあ俺はこれ使うよ。」

昂大はそう言って、にわか武士が持っていた日本刀を手にとった。

リリーナ「それを使うのね、繋は何使うの？」

繋はしばらく考えた後、答えを出した。

繋「リリーナ、魔道書余ってない？」
リリーナ「え、あるにはあるけど、素人には扱えないわよ。」
繋「じゃあ教えて。」
リリーナ「教えられないことはないけど・・・。」

リリーナは妙に口ごもった。

リリーナ「私でさえ、力が使えるようになるまで丸一日かかったのよ。ちょっとや、そっとで扱えるようになる物じゃ無いのよ。」

繋はそれでも諦めなかった。

繋「１０分で習得出来なかったら、取りあえず諦めるから、教えて。

」

リリーナは根負けし、

リリーナ「分かったわ、とりあえず詠唱から説明すると・・・。」

１０分後

繋「サンダー！」

ドンッという音が森に響いた。

リリーナ「ウ、ウソ・・・。」

リリーナは驚愕していた、ものの１０分で本当にマスターしてしまったからである。

繋「どう？出来たよ。」

リリーナ「凄いわ、あなた、魔導の天才よ。」

リリーナはかなり感動していた。

昂「さあ、装備も整ったし行こうか。」

リリーナ「ええ！」

三人は森を歩き始めた。

第一話～にわか武士の襲来～（後書き）

ご覧いただきありがとうございます！

次回もお楽しみに！

第二話～ＭＫ１５～（前書き）

宿題終わって、やっと投稿出来ました。どうぞ！

第二話～ＭＫ１５～

マルス「何でこんなことになったんだろうね。」

３ＤＳに飛ばされて来たマルスとシーダは森の中を彷徨っていた。

？「助けてくれ」に対してマルスはＹＥＳと答えただけで、何処かの森に飛ばされて来たのである。

シーダ「そう広くは見えません。助けて欲しいと言ってた人はこの先にいるのではないですか。」

マルス「そうかもしれないね、早く行こう。」

二人が歩いているといきなり上から声が聞こえた。

？「見つけたよ・・・！」

マルス＆ａｍｐ；シーダ「！！」

一方、その頃アイクたちはというと。

セネリオ「僕たちがこれから必要とする６人とはどんな人たちなんでしょうね。」

アイク「分からんが、それより先に、これから起きる動乱について考えるぞ。」

アイクたちはＳＤに指示された通りに、近くの森に来ていた。それほど深くないうえに虫や野鳥もたくさんいる場所で街の子供たちも遊びに来ることが多い、公衆森林浴場と呼ぶのに相応しい場所だっ

た。

セネリオ「あのＳＤの言葉で何か気になることはありましたか？」
アイク「気になるところだらけだったが、強いていえば・・・。」
アイクはかなり不思議そうな顔をしながら言い出した。
アイク「これから起きる動乱は”本来、当分起こるはずの無かった”ってところだろ。」
セネリオ「僕も同じです、あの言葉の意味がいまいちつかめません。」
セネリオはしばらく考え込んでいたが、ふと異変に気がついた。
セネリオ「・・・？おかしいですね・・・。」
アイク「何がだ？」
セネリオ「・・・音がしないんです。」
アイク「音？」
セネリオ「本来ならこの時間帯、鳥の鳴く声や、子供たちの声がしてるのが普通です。なのに、今は風の音すら聞こえない。」
アイク「本当だな・・・。」
セネリオの言う通り、森にはまったくと言っていいほど音がしてなかった。
その時。
アイク「・・・！誰だ！」
後ろには変わった格好をしている剣士たち、１０人ほどが立ってい

た。
そして、ゆらりと剣をなびかせながら、無言で襲いかかってきた。」
アイク「・・・。敵としてかかってきた奴には容赦せん、悪いが・・・あんたたちはここまでだ。」
アイクは常人では両手で持つのが精一杯のアロンダイトを片手で軽々と抜いた。

剣士たち、ＭＫ１５・・・マジでくたばる１５秒前

一方、その頃の昴大たちはというと。
昴「ロイ、なかなか見つからないね。」
リリーナ「ホント、何処行っちゃったのかしら、飛ばされてきた場所ってそんなに離れてたのかしら。」
リリーナが疲れて溜息をついたその時。
ドカッ、バンッ、ズカーンッ、
三人「・・・・・？」
何やら叩きつける音や爆発するような音がした。
リリーナ「・・・何かしら？」
繋「行ってみよう！」

三人は音がした方向に向かった。

三人は驚愕していた。

繋「何だ・・・これ。」

周りにはなぎ倒された剣士たちが散らばっていた。そしてその中央に大剣を持った青髪の男がいた。ファイアーエムブレム蒼炎の軌跡と暁の女神をプレイした人なら必ずと言っていいほど知っている男である。

昴＆ａｍｐ；繋「ア、アイク！」

固まっていた三人にアイクは気がついた。

アイク「何だあんたたちは、こいつらの仲間か？」

三人「い、いいえ！違います、ただ、人探しをしているだけです。」

三人が必死になって弁解していたときそこにセネリオが出てきた。

セネリオ「アイク、この人たちは敵ではないようですよ。さっきの剣士たちとはまるで、雰囲気が違う。」

アイク「そうだな、それよりあんたたち、早く森を出た方がいい。」

昴「どうしてです？」

アイクの隣にいたセネリオが答えた。

セネリオ「さっきアイクが倒した剣士のような奴らがいるんです、本来ならこの森にそんな物騒な輩がいることはあり得ないんですが

ね。
リリーナ「で、でも探してる人がいるんです。」
セネリオ「僕たちが責任を持って探しますよ。それに、僕たちも探している人たちがいるんです。まぁ、変な物体に命令されただけなんですけどね。」
三人「変な物体？」
三人にはその物体が何か分かったような気がした。
昴「それ、見せてくれませんか、多分、僕たちも似たような物持っているような気がするんです。」
セネリオ「？いいですけど。」
セネリオはその物体を取り出した。
黄色い３ＤＳである。
三人「やっぱり！」
そう言って、自分たちの物を取り出した。
セネリオ「！、それ、あなたたちも持ってたんですか！」
セネリオは金だらいが頭に落ちた様な顔をしていた。
セネリオ「しかし、何故それを・・・。」
三人は互いの顔を見合わせた後に話し始めた。
繋「簡単に言うと、僕たちはこの世界の人ではありません。その物

体によってこの世界に飛ばされてきたんです。」

アイクはかなり驚いた顔をしていた。

アイク「この世界の人ではないだって？そんな馬鹿な。」

アイクが困惑している中、セネリオは納得した様なかおをしていた。

セネリオ「なるほど、アイク、分かりましたよ。」

アイク「何がだ。」

セネリオ「アイク、僕たちが探していた6人の内、3人は多分この人たちですよ。」

アイクは何か気がついたようだった。

アイク「そうか！同じ物体を持っていたからその可能性が高いな。」

リリーナ「あの・・・探している6人ってなんのことですか？」

セネリオ「この物体に言われたんですよ。これから、僕たちが必要とする6人が森にいると。」

リリーナはその言葉について考えている途中であることに気がついた。

リリーナ「じゃあ、私の探している人、ロイもその中の1人になるわね！」

セネリオ「そういうことになりますね、あと2人が分かりませんが、とりあえずそのロイという人を探しましょう。いいですね、アイク？」

アイク「俺は構わんが、あんたら3人は自分の身を守れるのか？出来ないのなら俺たちに任せてくれ。」

アイクが心配そうに聞く。

昴「大丈夫です。僕たち武器持ってますから。」

アイク「・・・分かった、ただし危なくなったら、俺たちに任せろ。」

アイクは一抹の不安を感じるが昴大たちは聞きそうにないので、一緒に行動することを容認した。

昴「よし、行こう。」

昴大たち一行はロイを探すために、再び森の中を歩き出した。

第二話～ＭＫ１５～（後書き）

御覧になってありがとうございます！次回も御覧ください。

第三話～味方の証～（前書き）

どうも！これからは数日おきの更新にします。

第三話～味方の証～

マルスは声が聞こえた瞬間に剣を抜いていた。

マルス「ドルフィンスラッシュ！」

マルスは反射的に必殺技を発動した。が、既にそこに人の姿は無かった。

マルス「何だったんだ、今の声は。」

？「何処見てんの、こっちだよ。」

マルスが驚いて振り向くと、そこには１６、１７歳の少年が立っていた。

マルス「君は・・・？」

マルスが少年を警戒しながら、気配をうかがっていると。

少年「どうした、いきなりこの世界に飛ばされと思ったら、森の中に落ちて迷子になってしまったクチかい？」

マルス「なっ・・・！」

マルスは驚愕した。自分たちがこの世界に飛ばされて来たことを知っている人物は１人しか思い浮かばなかったからだ。

マルス「まさか、君・・・。」

少年「あ~ あ~ 違う違う。」

謎の少年は、けだるそうに否定した。

少年「君たちに助けを求めて来た奴とは違う。」
マルス「じゃあ、君は一体・・・」
少年「それはまた今度ね。今は、あるエンターテイメントを紹介しに来たのさ。」
シーダ「えんたーていめんと？」

シーダの頭の中には？でごった返しているが、マルスはそれを機にしている暇はない。

マルス「それで、そのエンターテイメントって何だい？」
少年「そこなんだよ、まあ、エンターテイメントと言っても、簡単に言ったら”試練”かな？」
マルス「試練？」

マルスは耳を疑ったがそこへ少年が言い放った。

少年「僕の部下を相手に戦ってくれるかな？」

マルスもシーダもとっさに身構えた、それと同時に森の中からたくさんの剣士が現れた。

マルス「一体何故、こんなことを！」
少年「君たちが僕の望んだような新しい物語を紡ぎ出せるかの小手調べだよ。」

マルスが言い返そうとした途端、剣士たちが襲いかかって来た。

一方、その頃出番の無かった男(ロイ)はというと。

ロイ「あぁ、どうしよう、リリーナとはぐれるなんて。」

ロイはリリーナの持って来た妙な物体に、「四の五の言わずについて来て！」と半ば強制的に異世界に飛ばされていた。ロイの心の内を表す様に風は虚しくなびくばかりだった。

ロイ「まずはリリーナを探さないとな。おーい、リリーナ！」

その時

ズバンと音がしたかと思えば1人の剣士が茂みの中から転がり出てきた。剣士は腹から血を出しており、完全に戦闘不能状態だった。

ロイ「な、何だ？何で茂みの中から怪我した剣士が出て来るんだ？」

ロイはいまいち状況を把握出来ぬまま茫然(ぼうぜん)と立ち尽くしていると、再び、先ほどの轟音(ごうおん)が鳴り響いたかと思えば、剣士がまた転がり出てきた。

ロイ「あっちで何かが起こっているな。よし、行ってみよう。」

ロイは音のした方向に走り始めた。そしてしばらくすると金属のぶつかる鈍い音が響いている場所にたどり着いた。そこには、青い髪の男女が戦っていた。

ロイ「あれはどういうことだ、どっちかに助太刀するべきなんだろうけど・・・。」

ロイは戦っている両方の勢力の顔を再び見た。ロイ的には青髪の男女を助けるべきだと思っているのだが・・・。」

ロイ「人は見かけによらないというからね、もしかしたらあの2人は悪人で、役人が捕まえようとしてるのかもしれない。」

ロイが、そんなことを考えていてどちらにつくか考えていたその時

マルス「うわっ！」

青髪の男が弾き飛ばされて倒れこんでしまった。その時に男のポケットから”何か”が転がり出た。それを見たロイの反応は早かった。

ロイ「大丈夫ですか！」

ロイは迷わずに青髪の男女の方に駆け寄り、マルスに追撃を加えようとした剣士をなぎ払った。

マルス「ありがとう、君は・・・？」

ロイ「話は後にしましょう。今はこの状況を切り抜けないと！」

シーダ「そ、そうですね。」

ロイが参戦したことは少年にとって計算外だったそうで、多少顔をしかめたがすぐに元の表情に戻った。

少年「まあいい、ロイが加わったことでさらに面白くなって来たからな。」

ロイは少年の存在に気づき身構えていた。

ロイ「何だお前は！何が目的だ。」

少年「新たな物語を紡ぎ出すことさ。」

ロイ「新たな物語・・・？」

ロイが考えていると、剣士の1人が斬りかかって来た。ロイは素早く対応して、これを退けた。」

ロイ「危ない、危ない。どうやら考えるのはこの後にする必要があるな。」

マルス「ええ、行きましょう。」

マルス、シーダ、ロイの3人は再び剣士たちに向かっていった。

第三話～味方の証～（後書き）

森編は多分次で完結です。

第四話～噺（はなし）の始まり（前書き）

約一週間ぶりですね、構想はあるんですけどなかなか時間がとれなくて執筆出来ませんでした。

それでは、森編の最終章です

第四話～噺（はなし）の始まり

アイク「つまり、あんたの目が覚めた時には既にロイはいなかったということか」
リリーナ「はい、私だけでした」

昴大たちはリリーナが目覚めたという場所に向かっていた。ロイの手がかりがないか探すためである。

セネリオ「しかし・・・変ですね」
アイク「確かに・・・どうなってるんだ？」

アイクたちがかなり怪訝（けげん）な顔をしていたのでどういうことか、昴大が尋ねようとした　　しかし

ガサッ

アイク「きた！全員、武器を構えろ！」
昴＆ａｍｐ；繋「え・・・！」

すると、草むらの中から剣士が飛び出てきて、昴大に斬りかかってきた。

昴「なっ！」

昴大は素早く刀を取り出して、剣士の一撃を受け止めた。ギリギリと金属の擦れる音が響き、鍔迫（つばぜ）り合いを繰り広げたが、相手は戦闘慣れしているらしく。刀を握るのが初めての昴大を押し込んで行った。

昴「くぅ・・・！」
繋「兄貴！」

繋太が助太刀に入ろうとしたが、別の剣士が襲いかかってきたのでそっちの対応に手を追われて、助けに来られなかった。剣士が昴大との鍔迫(つばぜ)り合いを今にも押し切ろうとした。しかし、昴大も負けていなかった

昴「・・・すきあり！」
剣士「がは・・・！」

昴大は剣士に膝蹴りをぶち込み一瞬の隙をつくった。当然、昴大がそれを逃すはずが無かった

昴「うぉぉぉぉぉぉ！」ザシュ！
剣士「ぐわぁ！」

昴大は剣士の脇腹を斬り、戦闘不能にした。

昴「よし、なんとか勝てたな。そうだ、アイクたちは？俺の他に剣を使うのはアイクだけで、繋太たちは魔導士だから、守ってやらなきゃな・・・・・って・・・おい・・嘘・・だろ？」

昴大は繋太たちのいた方向を見て絶句した。なぜならそこにいたのは無傷で佇(たたず)んでいる3人の魔導士と暇そうに剣を肩に担いでいるアイクとビクついている剣士たち数人とその周辺に散らばっている戦闘不能状態の剣士たちだった。

セネリオ「さぁ2人とも準備はよろしいですね」

セネリオの言葉に繋太とリリーナ無言で頷(うなず)いた。それとともに残った兵士たちの顔が恐怖で凍りつく

セネリオ「サンダー！」

繋「サンダー！」

リリーナ「サンダー！」

セネ＆amp;繋＆amp;リリ「トライアングルアタック！、サンダガ！」

辺りに凄まじい雷鳴が轟いたそれにより辺り剣士たちを一網打尽(いちもうだじん)にする

剣士たち「ぐわぁぁぁぁぁぁ！！！」

剣士たちの断末魔の叫び声が森に響いた後、静寂が訪れた。そして今、昴大は全力てツッコミたいことが1つあった

昴「ゲームが違うだろ」

それから1分後

アイク「さて、片付いたことだし。尋問でもするか

そう言って、アイクは先ほどのどさぐさに紛れて捕縛しておいた剣士の所に向かい、尋問を開始した

アイク「おい、あんたたちは何故こんな所で俺たちを襲った？一体誰に頼まれた」

剣士「そ、それは・・・俺たち”噺(はなし)”の親方に頼まれて・・・っうぐ！」

全員「！？」

剣士「・・ｋｋ５＞９３＋４噺３５４８５何ｐｓｇｕｎｗｋｋｊ斬ｎｅ／ｂｋ＆ａｍｐ；＆ａｍｐ；ｋｍｇｍｎｇｔｇ未@ｐ５たｊ÷５３＋６９５１２３たにｋｄｊｔ＆ａｍｐ；ｖｌｔｇｘｋｇ府ｊｄｓ５ｍｄ・・÷うぐぁ！」

尋問中にいきなり剣士が苦しみ始めたので思わず全員が身をたじろがせた。そしてしばらくすると剣士は身をだらんとさせて動かなくなってしまった

繋「一体・・・何が・・・」

ほぼ全員が予想外の出来事に茫然とする中でアイクとセネリオは別の点について驚いていた

アイク「”噺(はなし)”だと・・・まさか！」

セネリオ「アイク」

アイク「なんだ？」
セネリオ「”噺（はなし）”の親方って誰だか分かりますか？」
アイク「1人しか浮かばん」
セネリオ「そうですよね、多分ＳＤのことでしょう」
アイクとセネリオは”噺（はなし）”の親方について整理していたが、他のメンバーはＳＤのことを知らないので、何なことか分からなかった。
セネリオがそのことを説明しようとしたその時、セネリオがあることに気づいた

セネリオ「やっぱり、変です」
リリーナ「どうしたんです、いきなり」

昴大たちは全く意味が分かっていなかったので、セネリオはいきなりこう切り出した

セネリオ「みなさん、僕らが初めて出会った場所から一体どれぐらい歩いたか覚えていますか？」
繋「え？あれからだと・・・かれこれ２０分近く経ってますよね」
セネリオ「えぇ、確かにだいたいそのくらいです。でも、実はこの森・・・」

セネリオ「徒歩5分で横断できるんです」
昴＆ａｍｐ；繋＆ａｍｐ；リリ「！？」
さすがにこの発言には驚いたようで、昴大も狼狽（うろた）える
セネリオ「おそらく、その”噺（はなし）”の親方が何らかの術をかけてるん

だと思います。だからいつまでも抜けられないんです」
昴「そんな・・・」
昴大たちが驚きのあまり聞き返そうとしたしたしたその時
ズガァン！
全員「！！！」
リリーナ「何？今の！」
アイク「あっちの方向だ、いくぞ！」

一方、こちらは未だ戦闘中のマルスたち
マルス「数が・・・多い！」
ロイ「まったくですね、一向に手を緩める気はないようですね
マルスたちは無数の剣士たちを相手に互角の戦いを繰り広げていたがさすがに多勢に無勢で徐々に押し込まれていた
少年「何だ？何だ？何ですか？そのザマは！もっと楽しませてくれなきゃこっちだって困るんだよ」
少年は木の上で高笑いしていてこの現状を楽しんでいるようだった
ロイ「仕方ない、あの技を使おう！2人とも僕から離れて！
マルス＆ａｍｐ；シーダ「分かった！」
ロイは一息入れて大技を発動させた

ロイ「エクスプロージョン！！」
ズガァンという轟音と共に大量の剣士たちが吹っ飛んだ。その状況を見ていた少年から笑みがこぼれた
少年「いいね、いいね！最っ高だねぇ！愉快に素敵に決まっちまったぜ！」
それでも剣士たちの猛勢はまだ止まっていなかった。そして3人が諦めかけたその時
？「サンダー！」
閃光と共に剣士たちの一部が吹っ飛んだ。そして、サンダーを放った張本人が草むらから飛び出した
リリーナ「ロイ！」
ロイ「リリーナ！無事だったのか」
続いて昴大たちとアイクたちが乗り込んできて戦列に加わった
アイク「あんたたちのことはよく知らんが、ここは助太刀させてもらうぞ」
マルス＆ａｍｐ；シーダ「あ、ありがとう」
アイクたちが戦列に加わったことで形勢は一気に逆転した。そして１５分後、全てを片付けたアイクが木の上で笑っている少年に問いかけた

アイク「あんたがＳＤか？それとも”噺（はなし）”の親方と呼べばいいか？」
少年「どっちでもいいさ、君たちの好きな方で」

少年は笑いながらさらに続けた

少年「お疲れさん、どうやら君たちを選んだことは間違ってなかったみたいだ。僕の”噺（はなし）”が面白くなりそうだ」
昴「お前・・・まさかあの時の！」
少年「ご名答。あの３ＤＳは僕だ、それとアイクたちのもね」
アイク「やはり、お前はＳＤだったんだな・・・。」
少年「そういうこと、じゃあ、僕の”噺（はなし）”を盛り上げてくれよ。戦いの種は既に蒔（ま）いて来た
アイク「どういう意味だ！」

少年は今にも立ち去ろうとしていたが、最後にこう言い残した

少年「シナリオ通りの物語なんてつまらない、僕の目的はそこから新たな”噺（はなし）”をつくることなんだよ

そして数秒後、少年の姿は見えなくなりセネリオは小さく呟いた

セネリオ「”噺（はなし）”・・・ですか・・・」

１５分後、お互いの挨拶を済ませた昴大たちはアイクたち傭兵団の砦で今後どうするかを話し合っていた

アイク「奴の言う”噺(はなし)”では、またこの大陸で戦乱が起こるらしいが、これからどうする？」

全員しばらく悩んでいたが、やがてセネリオが口を開いた

セネリオ「クリミア城に行って、エリンシア女王に会って情報を集めたらどうでしょうか」

アイク「なるほど、それはいいアイデアだ。みんな、いいか？」

アイクたちと昴大たち以外はこの大陸のことを知らないので、とりあえずクリミア城に向かうことで合意した

アイク「よし、早速行くか」

アイクが立ち上がった瞬間にミストが部屋に入ってきた

ミスト「お兄ちゃん、お客さんだよ」

アイク「客？」

すると、中学生ぐらいの男女が部屋に入って来て、アイクだけでなく、昴大たち全員に顔を向けて頭を下げて来た

？「どうか、兄さんを止めてください！」

今ここに役者が揃った、本来出会うはずのなかった人たちが集う時、テリウス大陸をめぐる新たな物語が紡がれ始める。

第四話～噺（はなし）の始まり（後書き）

少年の台詞の中にとある魔術の禁書目録の一方通行（アクセラレータ）の台詞を参考にしている部分があります。あまりこういうことはするつもり無かったんですが、場面と合ったので使わせてもらいました。今後、こういうこともあるのであしからず。

それでは、次回から昴大たちの噺（はなし）が始まります。新たな物語にご期待ください。

第五話～少女の涙と計画の始動～（前書き）

今までで一番長いです。でもこの物語の中で重要な意味を持ちますのでしっかり読むことをお勧めします。
今回は初登場キャラが喋りまくります。

第五話～少女の涙と計画の始動～

深夜、クリミア城のある一室で秘密の談合が行われていた

？「準備はできてるかい？」

？２「ああ、計画は順調だ。全く問題ないぜ」

？３「今度こそ・・・」

？「エリンシアを殺す」

この時既にアイクたちの知らない所で新たな物語が始まっていたのだった

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

昴「君たち、誰？」

昴大たち６人が今後について話し合っていた部屋に客として入ってきた２人の少年少女がいきなり「兄さんを止めてください」と言ってきたので、全員困惑していた。その様子を見て、少女は何かに気づいたように「あっ！」と声を上げた

少女「すみません、忘れてました」

そう言って、何かをガサゴソと袋の中から出してきた

少女「お土産、忘れてました！お饅頭で良かったでしょうか？」

全員「そんなことじゃない！！」

昴大たちは少女の天然っぷりに思わず全員思いっきり頭を机にぶつけてしまった

少女「・・・？どうしたんですかぁ？」

少女は不思議そうな顔をしていたが、さすがに少年の方は気づいてるらしく、少女にそっと耳打ちをした。すると、少女は再び「あっ！」声を上げ、頬を赤らめた

少女「あ、あっ！すみません！そんな基本的なこと抜かしちゃって！ええ、と私は・・・私は・・・」

少年「僕の方から説明しましょう」

少女の呂律（ろれつ）が回っていなかったので、業（ごう）を煮（に）やした少年が説明をし出した

少年「僕の名前は”室崎（むろさき）　駿”。こっちの天然少女が”しい”です。お見知りおきを。」

しい「駿兄ちゃん！天然少女はよけいだよ！」

マルス「うん、それは分かったんだけど・・・君たちの兄って誰だい？」

マルス他、みんな思っていたことだ

しい「あなた方の中では”ＳＤ”とか”噺(はなし)の親方”とか呼ばれている方です

全員「！！」

駿がさらに話を続けた

駿「僕たち兄妹は能力開発をしているある都市に住んでました。兄はその都市で最強の能力者に上り詰めたんです。誰よりも努力を欠かさなかった、優しいお兄ちゃんでした。でも、ある日のことです、兄は”噺(はなし)”を創りに行くと言って姿をくらましてしまったんです。」

全員がその話に聞き入っていてみんなの目はシンケンそのものだった。話の続きはしいが話し始めた

しい「私たちは”噺(はなし)”の意味を知らなかったのでよく分かりませんでした。でも、その数日後に私たちはその都市の理事会に呼ばれたんです。そこで聞かされた話なんですが。兄は各世界を回り、その世界に干渉しているそうなんです。だから今、私たちはここにいるんです」

それを聞いたロイは何気無く疑問に思っていた

ロイ「でもさ、そんな簡単に世界を移動するのは可能なのかい？」

しい「普通は無理です。私の住んでる世界でも他の世界、つまり噺(はなし)が存在すると確認されたのはついこの前のことなんです。お兄ちゃんがどうやって世界を行き来しているのか分からないんです」

昴「ところで、君たちの兄さんがどうやって世界を行き来しているのか分からないのに、君たちはどうやってこの世界に来ているんだい？」

駿「それは僕が説明しましょう」

昴「うわっ！」
駿「？、どうしたんですか？」
昴「い、いや、何でもないよ」

いきなり駿が出てきたので昴大は思わず驚いてしまった

駿「それでは、説明しましょう。しいは異空移動（スペースポーター）という能力を持っているんだ。それだから、僕たちはこの世界に来られるんだ」
リリーナ「世界を行き来する能力ということですか？」
駿「そういうことです」
アイク「ところでだ」

アイクが会話を切って質問してきた

アイク「あんたたちの兄さんの名前はなんて言うんだ？」
駿&しい「・・・それは・・・分かりません・・・」
全員「！！？？」
マルス「し、知らないって、君たちのお兄さんじゃないのかい？」

あまりにも予想外の答えが帰ってきたので全員唖然としていた

しい「実は私たち、お兄ちゃんと血はつながっていないです」
ロイ「そんな・・・」
しい「少し長くなるけどいいですか？」

しいは次第にポツリポツリと話し始めた

しい「私たち2人は捨てられたんです6年前に、その時兄は小3で私は小1でした。暫くは状況が飲み込めずに、親がいつ迎えに来るかを待ってました。でも、いつまでたっても音沙汰無くて・・・。

私は兄と一緒に実家を目指しました、でも家のあった場所に着くと何も無くてただ空き地が広がっていたんです。近所の人に聞いたら、私をその都市に連れて行ったあとにすぐに引っ越しちゃったみたいで・・・。そこで私は始めて理解しました。捨てられたんだって。」
アイク「そいつは酷い話だな。自分の子を捨てて逃げただなんて」

アイクに限らず、全員この話に遺憾の意を示していた

しい「身寄りもなくて、困ってた私たちを助けてくれたのが当時高校生だったお兄ちゃんでした。その時まだお兄ちゃんは能力を開花させてなかったので、1人暮しをするのがやっとのお金しか支給されていなかったのに、新たに私たち2人分の生活費をなんとか捻出して、私たちを養ってくれたんです」

しい「それだけじゃありません、私たちにもっと楽な生活をさせようとして、能力の開発に心血注ぎ始めたんです。ただでさえ生活が苦しいのに、学業にもこれまでの倍以上の時間をかけるようになりました。大変ははずなのにお兄ちゃんは私たちの前では顔色1つ変えずに笑って接してくれていたんです。でも、ある日・・・事故にあってしまったんです」
昴「事故だなんて・・・そんな不幸な」

しい「一応無事でしたがお兄ちゃんは事故にあった後も無理を続けて能力開発のための勉強をやめようとはしませんでした。それを見かねたお兄ちゃんの幼馴染の女の子がしばらく私たちの面倒を見てくれたんです。ですから、お兄ちゃんは安心して治療に専念することが出来ました。それ以後はお兄ちゃんとその女の子が協力して私たちを養ってくれるようになりました。
そしてそれから少し後にお兄ちゃんの能力が開花して、その都市一の能力者になりました」

しい「お兄ちゃんの能力が開花したことで、支給されるお金も１０倍ぐらいになって生活には全く困らなくなりました。能力が開花してからお兄ちゃんはある通り名で呼ばれるようになりました」

繋「ある通り名？」

しい「ええ、その通り名で今でも呼ばれているんです」

シーダ「その通り名とは？」

やがてしいが一息いれて言った

しい「お兄ちゃんは執行代理人（エージェントリスト）と呼ばれています。みんなそう呼んでいますから、誰もお兄ちゃんのことを本名で呼ばなくなりました。私も昔から「お兄ちゃん」と呼んでましたから、本名を知ろうとしませんでした」

セネリオ「執行代理人（エージェントリスト）ですか・・・」

マルス「１つ聞きたいんだけど、その噺（はなし）を無理矢理外部から干渉すると何か不都合なことがあるの？」

しい「２つあります。１つ目は、本来各世界は行き来はおろか干渉さえも出来ないはずなんですが、何らかの方法で他の世界へ行って

しまうと、その世界の秩序が乱れてしまいます。そして2つ目が一番肝心なところなんですが・・・」

しいは静かに告げた

しい「たくさんの世界が干渉を受けると全ての世界が崩壊してしまうと言われているんです」

全員「！！？？」アイク「な、何だと！」

こればかりはアイクもかなり取り乱した

アイク「それは本当なのか？」

しい「あくまで推測です、しかしもうすぐ影響がで始める世界があるんじゃないかと言われているんです。一体どれぐらいの世界が改変されたかは分からないのではっきりしたことは言えないんですが」

アイクはかなり頭を捻っていたようだがもう限界だったらしい

アイク「セネリオ、どういう意味か理解出来るか？」

セネリオ「確実に僕の思考的な範疇（はんちゅう）を超えていますね、普通の人に理解しろと言われても無理ですよ。ましてや、アイクの頭じゃ無理ですよ」

アイク「どういう意味だ」

アイクは少々キレ気味に聞いた

セネリオ「そのまんまの意味ですよ。さっ、さっきの話の続きですが、私たちが理解するには難しいと思いますよ」

しい「そうですよね・・・常識の範疇（はんちゅう）を超えてるのですぐに理解しろとは言いませんよ」

繋「ねえ、しい、ところでそれからお兄さんには会ったの？」

しい「・・・・・・・・・・・・・・・」

繋「しい？」

しいがいきなり黙ってしまったので繋は焦ってしまったがすぐにしいの顔は元に戻った

しい「ええ、少し前のことになります。私たちはある場所でお兄ちゃんに再会しました。でも・・・お兄ちゃんは・・まるで・別人の・・・、グス、・・・ようでした・・・」

するといきなり、しいが大粒や涙を流し始めたので、全員たじろいてしまった―（特に繋太）

しい「私は、お兄ちゃんに・・・呼びかけた・・・けど・グス・・・お兄ちゃんは・・何にも・・・うぅぅぅぅ」

繋「うわ、僕が悪かった、僕が悪かったから泣かないで！」

繋太の質問が発端でしいが大泣きしてしまったので、周りのみんなから「女を泣かせやがったな。クソッタレやろう」と言っているような目つきで睨まれた

しい「すみません、取り乱してしまって。大丈夫ですから、とにかく、お願いです、お兄ちゃんを止めてください！」

一瞬な間の後、みんな一斉に立ち上がった

アイク「もちろんだあんたたちの兄さん、止めて見せる」

セネリオ「僕の魔導、存分に使ってもらって結構ですよ」
昴「そこまで言われちゃほっとけないさ！だろ？繋太！」
繋「あ、ああ、もちろんだよ！世界のためにも、君たちのためにも！」
マルス「よく分からないけど、君の熱意、響いたよ、ここに」
シーダ「頑張りましょう、お兄さんを一緒に止めましょう」
ロイ「君が望むのなら僕はいくらでも力を貸すよ！」
リリーナ「あなたの心意気、確かに受け取りました。頑張りましょう」

しい「みなさん・・・ありがとう・・・」

しいはあまりの感動にむせび泣いていた

駿「話はまとまったようですね」

昴「う、うわぁ！いきなり出て来るなよ。」
しい「おやぁ、失礼」
昴「天然なのは妹じゃなくて、本当はあんたの方じゃないのか？」
駿「さて、どうでしょうか？」

駿はぬらりくらりと会話をそらしてしまった

昴「食えない奴だ」

アイク「よし、全員準備はいいか？」
セネリオ「異常ありません」
全員「いつでも出られるよ！」

全員の準備が完了したのを見てアイクは号令をかける

アイク「行くぞ！クリミア城へ！」

第五話～少女の涙と計画の始動～（後書き）

次回は作品設定とロイの憂鬱です

特別編～登場人物紹介とロイの憂鬱～（前書き）

登場人物の紹介をします

そして特別編、ロイの憂鬱を収録！

特別編～登場人物紹介とロイの憂鬱～

登場人物紹介

水淵　昴大　　生年月日１９９３年
４月１０日
とある高校の三年生成績は下から数えた方が早いが運動神経は抜群に良い。サッカー部に所属し、県指折りのストライカー。
ゲームの腕はイマイチ。
剣士一（刀使用）ＬＶ２　ＨＰ１８　装備　日本刀

水淵繋太　　生年月日１９９４年
３月２５日
県トップレベルの高校二年生成績は未だかつて５番以下をとったことがない一教科平均９４点。兄ほどではないが運動神経は良い。ゲームの腕はかなりのもの。洞察力は天下一品
魔導士ＬＶ２　ＨＰ１６　装備　サンダー

アイク
かつてテリウス大陸を救った英雄。蒼炎の勇者。大剣を片手で軽々扱えるほどの怪力の持ち主。グレイル傭兵団の団長で現在はクリミア王国の復興に務めていた。出演作　ファイアーエムブレム蒼炎の軌跡、暁の女神
勇者ＬＶ１４　ＨＰ４３　装備　アロンダイト

セネリオ
アイクを慕うグレイル傭兵団の参謀。その頭脳で今までたくさんの戦いに勝利を収めてきた。同時に、かなり優秀な賢者でもあり魔導の腕は国随一

賢者ＬＶ５　ＨＰ２８　装備　サンダー、ウインド、エクスカリバーｅｔｃ

マルス
アカネイヤ大陸の全域を支配する絶対的英雄。ファイアーエムブレムシリーズ最初の主人公であり、スマブラでも活躍している。出演作　ファイアーエムブレム暗黒竜と光の剣、紋章の謎
ロードＬＶ１４　ＨＰ３２　装備　レイピア、ファルシオン

シーダ
アリティア王国の王妃、つまりマルスの妻。戦う王妃さまとして巷でも有名になっている。戦闘力はかなりのもので壁役も務められた
ファルコンナイトＬＶ６　ＨＰ３１　装備　鉄の槍

ロイ
ファイアーエムブレム封印の剣出演
ロードＬＶ２　ＨＰ１７　装備　なまくらレイピア

リリーナ
エレブ大陸のオスティア盟主。圧倒的な魔導の才を持ち、最終的に攻撃力がロイを上回るために、ロイから恐れられ、サンダーしか与えられていない
賢者ＬＶ３　ＨＰ２８　装備　サンダー

室崎　駿
しいの実（じつ）の兄。さわやかなキャラで食えない奴。自らの能力を応用して戦うが能力は未だ不明
？ＬＶ１２　ＨＰ３５　装備　謎の粉

室崎　しい

駿の妹、天然キャラで憎めない。実は柔道四段、空手四段、剣道五段でかなり強い。能力は異空移動（スペースポーター）で世界を移動するには欠かせない剣豪（ソードマスター）ＬＶ２　ＨＰ２７　装備　防犯用刀

以上！

？「ちょっと待ったぁぁぁ」

～　ロイの憂鬱～

ロイ「作者！この登場人物紹介はなんですか！」

作者「ん？何か変なところでもあった？」

ロイ「大ありですよ！僕の紹介の所！何で出演作と能力しか書いてないんですか！」

作者「ああ、そこね、何となく」

ロイ「何となくですか！それ以前に本編でも、僕の出番少なすぎですよね！」

作者「君だけじゃないよ、シーダだってそうじゃないか」

ロイ「それはそうですけど、この登場人物紹介を見る限り、やっぱ

り僕、冷遇されてますよね！しかも、僕弱すぎでしょ！何ですか！ロードＬＶ２に、装備　なまくらレイピアって！」

作者「まあ、君の出番はこの先あるから我慢してよ。あれ？リリーナが来たよ」

リリーナ「ロ～～イ～～？」

ロイ「な、何？リリーナ？」

リリーナ「最近、私にサンダーしか渡さないのはそういうことだったのね～？」

ロイ「な、何のこと！ってまさかあの登場人物紹介に書いてた！」

リリーナ「ロ～～イ～～私はあなたの寝首をかくようなことはしないから安心して～～～♪、ちょっと痺れさせるだけだから」

ロイ「あ、ちょ、ちょっと！リリーナ！僕はそんなこと微塵もｋ・・・」

リリーナ「真っ黒焦げになりなさい！」　　ズバーン

ロイ「何でこーなるの！」

終わり

特別編～登場人物紹介とロイの憂鬱～（後書き）

今後、自称はこう固定します

昴大　俺、繋太　僕

繋太→昴大は「兄さん」
昴大→繋太は「繋太」となります

今後ともこのシリーズをよろしくお願いします

第六話～良くない条件に合致＝ありがたくない称号～（前書き）

約一ヶ月ぶりの更新です。相変わらず駄文丸出しですが、地道に頑張ります。
今までは文章が分かりにくかったり単調になったりしましたが、これから徐々に克服して行きたいとおもいます。それと、これからは原作の中にとある魔術の禁書目録を入れたいと思います。読んでない人でもわかるようにはしていくつもりです。これからもよろしくお願いします。それではクリミア王城編のスタートです。

第六話～良くない条件に合致＝ありがたくない称号～

？２「それでどうするんだ？どうやって殺すのです？」

？「心配するな、明日、国中の諸侯や来賓を集めた晩餐会（ばんさんかい）がある。それに乗じてだ」

？２「しかし、どうやって？晩餐会の料理に毒を盛るにしても警備が厳しいのですよ。特に女王の料理には毒味係までいるのですよ、どうやって殺すつもりです？」

？「私は晩餐会に乗じると言ったはずだ。まぁ、任せておけ。秘策がある。」

？３「なるほど、さすが、～～様。どこぞの女王様とは違いますな」

？「あともう少しだ、そうすれば私も・・・ふふふ・・・」

歴史書には存在し得ない噺（はなし）が、クリミア王城内で始まろうとしていた

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

繫「ええ！しいって１５歳なの？じゃあ僕と同い年じゃないか」

しい「え、ええ、高校2年生ですし・・・」

昴「まさか繫太と同い年とはねぇ」

昴大たちは、クリミア城を目指して街道を歩いていた。現在の季節は夏らしく、昴大たちを照らしていた。道には数多(あまた)の行商人が各地の行脚(あんぎゃ)の途中であるのを示すように額の汗を拭いながら、商売人魂を見せつけるがごとく、笑顔で商売していた。

繋「しかし・・・暑いな・・・」

この猛暑でこのパーティーの中にも参っている人物がいたが、問題ない人たちがいた。

アイク「みんなどうした？やけに疲れてるみたいだが」

昴「あ、本当だ。遅れ出している人たちがいるよ、俺はまだ余裕だけど」

しい「本当だ！全然気づかなかったよ！やっぱり、お土産はパワーの出る物じゃなきゃいけなかったかな？やっぱ、学園都市製のお菓子「はびこるなつやすみ」じゃパワー出ないよね」

マルス「なんであの3人はあんなに元気なんだ・・・」

アイク他2人がパーティーの先頭を歩いているが他のメンバーは暑さと疲れにやられて徐々に遅れ始めていた現在のところこんな感じだ

アイク、昴大、しい・・繋太・セネリオ・・リリーナ・・・・・・マルス、シーダ・・・・・・・ロイ・駿

繋「・・・・・・。」
繋太は少し前を行くしいに追いついた。どうしても聞きたいことがあったからだ。
繋「あのさ、しい」
しい「何、繋太？」
繋「何で駿さんはあんなに遅いんだ？」
しい「そうね・・・」
しいはしばらく考えて、自分が最も納得する答えに辿り着き、さらっと言ってのけた
しい「ヘタレだから？」
ズデッ
繋「な、何ですとぉ？」
しいの答えに虚をつかれた繋太は紐を失ったマリオネットのように崩れ落ちた。
しい「だ、大丈夫？」
繋太の猛烈な崩れっぷりに逆に驚かされたしいが思わず駆け寄って

来た。

繋「し、しい？自分のお兄さんに向かってヘタレなんて行っちゃダメだよ？」

繋太はしいに対して諭すように言うが、しいは「でも、事実だよ」と満面の笑みで言ってきたので繋太は諭すのを諦めたが、あることに気付いた

繋「（あれ？でも、足が遅いとヘタレっていう法則から言うと・・・）」

繋太はあることに気づきそうだったが、今は先に聞きたいことがあったので後回しにした

繋「それともう一つ、何で君はそんなに体力があるんだ？」

しい「何でって言われても・・・やっぱりそうだね、だって私は・・・」

少し間をおいてから、言い放った

しい「風紀委員（ジャッジメント）ですの？」

繋「・・・・・・・？」

しい「あれ、知らない？風紀委員（ジャッジメント）。学園都市の生徒だけで構成される治安維持機関のことだよ」

繋「なるほど、つまり、生徒だけで構成される警察ってこと」

しい「そういうこと！」

繋「あっ、でももう一つ」

繋太には新たな疑問が生まれつつあり、それは抑えきれないほど高まりつつあった

繋「さっきの言い方どう考えてもおかしかっただろ」

しい「ですの？の部分のこと？あれは私の大先輩の言い方なの。昔も今も恐れられてるの、あの言葉を聞いたら、犯罪者は即逃げ出してたみたい」

繋「うーん、どんだけ怖い人なの？」

しい「まあ、怖いと言うよりは腹黒いと言った方がいいかもしれないわね。私もその人みたいになりたいなって思ってるの」

繋「えっ！しいは腹黒くなりたいの？」

しい「そ、そんなわけないでしょ！そういう意味じゃなくてね・・・・・」

アイク「おい、みんな！見えてきたぞ」

そうこうしている内にクリミア城下が見えてきた。一行はエリンシアのいるクリミア城へと歩を進めた

城門前

ロイ「ア、アイクさん？こんな堂々と城門前までやって来てだいじょう・・・」

アイク「大丈夫だ、問題ない」

ロイ「・・・・・・・・・」

ロイが言い終わる前に応えてしまったので、ロイは少々落ち込んでしまった

兵士「おい、誰だ！」

アイク「グレイル傭兵団団長アイクだ。エリンシア女王にお取次願いたい。急を要することだ」

兵士「こ、これはグレイル傭兵団団長のアイク殿であったか、少々

お待ち願いたい」

そう言って兵士は急いで走り去った

マルス「すごいねアイクは、女王様にこんな簡単に会えるなんて」

セネリオ「アイクの功績、グレイル傭兵団のクリミア王国復興に対する援助活動を鑑(かんが)みれば当然のことです」

それもそのはずアイクはクリミア王国だけでなく、テリウス大陸全体の英雄と言っても過言ではないし、グレイル傭兵団は現場の指揮から雑務まで何でもこなしたためクリミア王国内で評判となっている

そんな話をしていると繋が何かに気づいたようではっと顔を上げた

ロイ「どうしたんだい繋太」

繋「いや、さっきしいから聞いた話を整理してて気がついたんだけど・・・」

繋太、本日初の爆弾発言

繋「ロイってヘタレだったんだね」ニコッ

リリーナ「そういえばそうね、あなたにピッタリの称号じゃない」

ロイ「な、何でそんな結論にたどり着くんだ！リリーナもそんなこ

と言わないで！それと僕はヘタレじゃなーーい」

ロイの虚しい叫び声が王城中に響き渡ったという

第六話～良くない条件に合致＝ありがたくない称号～（後書き）

訂正です。繋太の誕生日を１９９４年６月２５日にしますそうじゃないと昴大と繋太が同じ学年になってしまいますから。
それでは次回をお楽しみに。

第七話～イレギュラー～（前書き）

クリミア王城編第二話です。こんな文章ですが、このシリーズの先は長いので、最後まで見届けてもらえれば幸いです。

第七話～イレギュラー～

？「さて、そろそろ動くか。晩餐会の準備が始まった頃だろう」
？２「えっ！あなたの計画では晩餐会前にすることは特に無いように思えるのですが」
？「念のためだ、女王の習性が分かっていたとしても、もしものことがある。これは我が親方からもらった物だ。こいつをちょっくら城門の見つかりにくい所にはっつけて置いてくれ」
？３「あの、これは一体・・・？」
部下の多くはどういう物か分かってないらしい。仕方ないので、こう切り出した。
？「なあ、お前ら。陽動って言葉ぐらいは聞いたことあるよな？」
余程のイレギュラー因子でも無い限りこの作戦は順調に進むと彼らは思っていた。しかし、彼らは気づいていない。
既に自分たちがイレギュラー因子であることを。そして、新たなイレギュラー因子が近づいていることを。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

エリンシア「これは、アイク様。よくぞお越しになられました」
アイク「おいおい、一国の女王様が一傭兵団の団長に敬称で呼ぶな

んて、貴族らに聞かれたらまた叩かれるぞ」

かつて、クリミア王国だけでなくテリウス大陸全体を救ったアイクは各国の王から一目以上おかれているのだが、エリンシアにとってはそれ以上の存在で見られている。
それは女王となった今でも変わらない。だから、今も昔もずっと敬称で呼んでいるのだ。
そのうち、昴大たちの存在にも気づいた様だったので手短かに挨拶を済ませて本題に入った。

アイク「最近何か変わったことはなかったか？国内の情勢でも、身の回りのことでもいいから」

エリンシア「変わったことですか・・・」

エリンシアは何やら考え込んでいたが、やがて「ちょっと待っててくださいね」と言って何処かに行ってしまった。

１０分後、エリンシアが「皆様お待たせいたしました」と言って何かを持って来た。

アイク「木箱のようだな、中を開けるぞ」

アイクが中を開けると中には空っぽで塵（ちり）一つ入っていなかった。

エリンシア「その中に入っていた物が先日消えたんです」

アイク「そんなに大事な物が入っていたのか？」

するとエリンシアはかなり言いにくそうに俯いていたが、やがて決心した様に告げた」

エリンシア「それはアミーテの入っていた箱なんです」

アイクとセネリオが凍りついた

アイク「・・・・・それはつまり、アミーテは盗まれたって事か」

エリンシア「どうやらその様です。一体どうやってとって行ったのやら・・・あの、セネリオ君？」

セネリオ「・・・・・・・・・・・・・すみません。もう一度言ってください」ゴゴゴゴッ

セネリオは冷静に言っていたが、セネリオの周辺にいた者は明らかな変化を感じ取っていた

マルス「な、何なんだこの威圧感は？」

シーダ「セ、セネリオ君？何やら赤いオーラが出てますけど、アミーテってそんなに大事な物なんですか？」

セネリオは赤いオーラを持続させながらも丁寧に説明した。

セネリオ「・・・アミーテとはクリミア王国に伝わる宝刀。必ず２回攻撃ができ、元々２回攻撃ができる相手には４回攻撃が可能な優れものです。実際、エリンシア女王もこれを用いて戦場に立っています。それより」

どんな時も冷静なセネリオだが、こればかりは少々キレ気味だ。セネリオが感情を露わにして怒ることなど滅多ない怒るとしたら。

セネリオ「どうしたのですかアイク？ウインドなんか持って」

アイク「セネリオ！俺はついに魔導に目覚めたんだ！もう剣はやめた！」

セネリオ「・・・・・・・・・・ボソッ、魔防低いのに・・・」

というシチェーションが起こるのと同等の確率・・・とまではいかないが、それぐらい無いものだと思って欲しい

セネリオはしばらく負のオーラを出し続けていたが、エリンシア相手には怒れない様で、徐々に収束していった。

セネリオ「それで、他に盗まれた物は無いのですか？」

エリンシア「ええ、他にはなにも。ただ・・・」

セネリオ「ただ？」

エリンシアが何か言おうとした時、部屋にノックの音が響き、エリンシアが入室を許可すると一人の執事が入ってきた。

執事「エリンシア様、晩餐会（ばんさんかい）の準備が整いました。諸侯・諸邦の方々がお待ちですので、大広間にお越しください」

エリンシア「あら、そんな時間？遅れるわけにはいかないわね」

エリンシアは執事を下がらせた後、アイクたちに向き直った。

エリンシア「みなさまにもう一つ見せたい物が有るのですが、あいにく諸侯を集めた晩餐会がありますので、晩餐会の休憩時間までお待ちいただけないでしょうか」

アイク「別に構わんが、それまで俺たちは何をすればいい？」

かなり時間が押しているらしく、エリンシアは慌てていたが、来賓(らいひん)の部屋で待っていて欲しいと言い残して部屋を出て行った。

アイク「こ、これは・・・・」

マルス「何という・・・」

ロイ「ことでしょう・・・」

何やら三人ともビ〇ォーアフターみたいなこと言っているが、彼らの前に広がっていた風景はというと。

昴「に、肉がやけに多いけど、クリミアの人たちは肉が好きなわけ？」

セネリオ「そういうわけではありません。これはアイク対策でしょう」

彼らの前には大テーブルの半分ほどを占めている肉料理があり、今にも肉を食わんとすアイクだった。

アイク「これはエリンシアの俺への挑戦状と受け取って良いか？」

そう言うと、アイクは大量の肉の前に立ち言い放った

アイク「どうして俺の前に出された、食い物として出された物へ容赦はせん。悪いが、あんたはここまでだ」

繋「そのセリフ、肉に対して言うものじゃ無いんだと思うんだけど」

ちなみにアイクはあっさり完食したという。

第七話～イレギュラー～（後書き）

ついに次回、決行されます。

第八話～決行のちチェックメイト～（前書き）

最近忙しくなりました。土日ぐらいしか集中して書けないと思いますけど、できるだけ早く書けるようにしますので、これからもよろしくお願いします。

第八話～決行のちチェックメイト～

？２「例の物の設置完了しました」

？「そうか、ではいつでも出られるようにしておけ。それと、外にいる待機部隊にも合図があればいつでも出られるように通達しておけ」

男は窓を開けて、今にも沈まんとす夕日を見つめて呟やき、仕掛けを起動させるスイッチを握り締めた。

？「さぁて、楽しい楽しい遊戯噺（エンターテイメント）の始まりだぜ」

晩餐会（ばんさんかい）が始まってから既に一時間。部下からエリンシア女王の動向を聞いた男はニヤリと微笑んだ後、迷いなくスイッチを起動させた。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

アイクたちが食事を終えた頃、ちょうど晩餐会（ばんさんかい）も一段落したそうで何かを抱えて戻ってきた

エリンシア「先ほど見せたいと言ったのは、これを見てもらいたかったからです」

そう言って何やらゴソゴソと取り出してきたエリンシアだが、その代物の正体を眼中に収めたアイクたちは度肝を抜かれた。

一同「金色の３ＤＳ！」

彼らは以前このようなシチェーションに出くわしたことがある。
この世界に連れてこられた時だ。
謎の声に導かれるようにして集まった彼らだが、まだ分からないことが多い。執行代理人（エージェントリスト）のもくてきもまだはっきりしていない。何よりも分からないのは３ＤＳのことだった。
昴大・繋太・マルス・シーダ・ロイ・リリーナの六人は、３ＤＳの声によってこの世界にやってきた。しかし、マルスたちとロイたちは同じ緑色、昴大たちとアイクたちは黄色でだった。
未だに声の主は、はっきりしていないが、黄色の方は執行代理人（エージェントリスト）のことだと分かっている。緑色の方は、はっきりしていない。
手がかりとしては、同じ色にも関わらず声の主が違うということぐらいだ。
そんなことを考えながら昴大はおもむろにその金色の３ＤＳを手に取りスイッチをつけたすると。
？「聞こえているかい？みんな」
全員「！！！」
突然３ＤＳからメッセージが現れ出した。この時昴大はこの世界に飛ばされてきた時のことを思い出していた。
昴「あの時と同じだ、この世界に飛ばされて来た時と・・・。だいたい予想はつくけど、あなたは誰だ？」
昴大はごく普通に話していたが、相手はけっこう焦っているみたいだった。

？「四の五の言わずに今すぐ聞いて欲しいことがある。落ち着いて聞いてくれ」

意外な態度に全員かなり意表を突かれた。昴大がさらに詳細を聞き出そうとしたその時・・・。

ズッカァァン！！！

アイク「何なんだ今の音は！何が起こった！」

思わぬ状況に全員動揺していたが、そこに３ＤＳが語りかけてきた。

？「落ち着け。おそらく、プラスチック爆弾の類だろ。門が吹っ飛んだみたいだ」

シーダ「城門で何が？とりあえずそこに行って見ないと！」

シーダの声に、全員が続こうとしていたが、そこに３ＤＳははっきりと言った。

？「待て！そいつは罠だ！奴らがエリンシア女王を一人にするための陽動作戦にしか過ぎない！」

昴「何故そんなことが言える？あんたは一体何者だ」

ほぼ全員３ＤＳの言うことを怪しがっていたが、一人だけ例外がいた。

アイク「分かった、あんたを信じよう。俺たちは何をすれば良い？」

繋「ア、アイクさん？そう簡単に３ＤＳを信じて良いものなんでしょうか？」

未だに怪しがっている繋太だが、アイクは表情を変えずに繋太を諭した。

アイク「確かにこいつは何者か分からんが、よく思い出してみろ。今までにこいつが嘘をついたことがあったか？」

繋太は今までに３ＤＳが現れた時のことを思い出していた。自宅に現れた黄色の３ＤＳそしてアイクたち三組に贈られた時のこと。話を聞く限り、確かに３ＤＳは嘘をついていない。

アイク「それにだ、こいつは今までに俺たちの前に現れた奴とは何かが違う様な気がする。根本的な何かがだ。こいつは一生懸命俺たちに語りかけてきた。何と言うか、誠意は嫌というほど響いた。俺はこいつを信じてみたい」

アイクの言葉を聞いた後、繋太は３ＤＳをチラッと見たそして何かを決心した様にアイクの方に向き直った。

繋「分かった。今は現状を打開するのが先だからね」

繋太をはじめ全員が３ＤＳの方に向き直った。繋太はそれを見て３ＤＳが安心しているように見えた気がしたが、すぐに気のせいだろうと気持ちを切り替えた。

？「とりあえず信じてくれるんだね、良かった」

セネリオ「あくまでも暫定的にですよ？あなたが何者か分からない

限り完全に信用できませんからね」

？「それでもだよ。このゴタゴタが終わったら説明する。それじゃあ本題といこうか」

その後、３ＤＳはアイクたちに指示を出し始めた。

？「みんな各々の３ＤＳを持ってるよね。とりあえず電源をつけてくれ」

昴大は持っていた３ＤＳを起動させたが、アイクたちに地球産の電子機器が使えるはずもなく、混乱していたが、繋太が使い方を教えて事なきを得た。３ＤＳは全て電源がついたのを確認すると、３ＤＳは次の指示を出した。

？「よし、次は＞親機と同期＜を選んでくれ」

昴「＞親機と同期＜？そんなのあったか？」

そう言いながら昴大が見てみると確かにあった。

本来なら差したゲームソフトが表示される場所に

昴「あれ？これじゃあ、いざゲームソフトを差してもできないよう

な気がするんだけど・・・」

昴大がカタカタと金の３ＤＳに向き直ると、とうの金の３ＤＳは「これはただ単に３ＤＳを模した通信機器なんだからそんなことできるわけないだろう」とあっさり返答した。それを聞いて昴大は「やっと初代ＤＳから卒業できると思ってたのに・・・」と漏らし、がっくりと肩を落とした。

セネリオ「それはいいですけど同期が終了したようですよ」

落ち込んでいる昴大をよそにセネリオは報告し、それを聞いた金の３ＤＳは次の段階の説明に入った。

？「よし、これで下準備は完了だ。これでそれぞれの３ＤＳに俺と通信ができるようになった。次はこれからどうすれば良いかだが」

金の３ＤＳが出した指示はこうだ

繋太とセネリオは城の屋上に移動して次の指示がくるまで待機。その他はこの部屋でエリンシアの護衛だ。金の３ＤＳは屋上向かう繋太とセネリオを見送った後に指示を付け加えた。

？「それと剣か槍で戦うのなら、極力威力の低いやつにしておけ」

マルス「何でだい？せっかくファルシオン装備しようと思っていたのに」

意外な注文だったので何故かと聞くと金の３ＤＳはこんなことを言った

？「だって自分が持っていた武器が強力過ぎたせいで自分の受ける
ダメージが大きくなったらシャレにならないだろう？」

アイク「どういうことd・・・」

その時、外で動きがあった

リリーナ「あ、あれをみて！」

アイクたちはすぐさま窓に近づき外を見た。

そこに広がっていたのは・・・・・

～～～

？2「待機部隊が進軍を開始しました」

？「そうか、エリンシアの様子はどうだ？」

？3「それが、今、客人と談話中だったようで・・・」

その報告に謎の男は眉を潜めた

？「（客人だと？そんなことあの方言っていなかったが・・・まあいい）」

謎の男は、疑問を投げ捨てた。些細なことは気にしないようだ。

？「どうせ俺様の敵ではない。あいつらも動き出したし、問題はないだろう」

謎の男はエリンシアの部屋に目を向けた、そして勝ち誇った声で呟く

？「エリンシア女王よ・・・チェックメイトだ・・・」

エリンシア「私、アイク様と同じ部屋にいたのに、あれを渡したっきり会話に入れませんでした（涙目）

第八話～決行のちチェックメイト～（後書き）

次回、クリミア王城編クライマックスです。謎の男の力が明らかに。
そして繋太とセネリオは・・・！
次回をお楽しみに。

第九話～反則的力＝チート～（前書き）

休日の内にできるだけ書いておこうということで頑張りました。今までで一番長くなっています。

読みにくかったらすみません。

第九話～反則的力＝チート～

繋「大変なことになってきたねセネリオ」

セネリオ「そうですね、今は何が起こっているかを把握する必要があります。早く屋上に上がって外を確認しましょう」

繋太とセネリオは金の３ＤＳに指示された通りに屋上に向かうため階段を駆け上がっていた。５分ほど前に起こった城門での爆発、金の３ＤＳの真意を確かめるべく。

繋「さて、もう少しだ。ここを上がれば良いんだろ？」

金３ＤＳ「そうだ、ついたら外の状況を教えてくれ」

繋太たちに外の状況はまだ分かっていない。しかし、彼らには聞こえていた。兵士の阿鼻叫喚めいた叫び声を。

そうこうしている内に繋太たちはドアを蹴破り屋上へ出た。二人は急いで屋上の端から下を覗き見た。

繋「何だ・・・この大量の兵は・・・」

セネリオ「５０・・・いや、１００はいますね。しかし・・・何かおかしい・・・」

本来ならこの数の敵をどうするかを考えるべきはずなのだか、セネリオは違うところに興味がいっているようだ。しかし彼らが悠長に構えている暇はなかった。既に謎の部隊がクリミア軍とぶつかって

いたが、どう見てもクリミア軍が押されているようにしか見えなかったからだ。

オロオロしていた繋太だったが、その時謎の部隊の兵の一人がクリミア兵の一人を斬り裂き、鮮血が飛び散った。

繋「ヒッ！あ・・あ・ああ・・・」

セネリオ「繋太！」

繋太がその光景を見て思わず腰を抜かしたので、セネリオが咄嗟に支えた。繋太がこの様な光景に耐性が無いのは当然と言える。しかし戦場ではその様な輩は足でまといでしかない。

セネリオは「下がっていますか」と聞いたが、繋太は早く戦いを終わらせる為に残ることを決断した。その直後、金の３ＤＳから通信が入る。

金３ＤＳ「大丈夫か繋太。大丈夫なら状況を説明してくれ」

繋太は外の状況を事細かに説明した。敵の位置から進行速度、戦況の自分なりの解釈までつけていたので、さすがにセネリオも驚いていた。

セネリオ「（戦場を見て取り乱してはいましたが、それでもここまで把握できているとは・・・なかなかの洞察力の持ち主ですね、軍師向きなのかもしれない）」

セネリオが繋太に感心している頃、状況を把握した金の３ＤＳは新たな指示を出した。

金３ＤＳ「よし、クリミア軍に被害が出ているのなら急がなくてはならないな。二人で力を合わせてどでかい一撃を叩き込んでくれ」

セネリオ「分かりました・・・しかし、どでかい一撃と言われてもそんな強力な魔法攻撃を撃ち込むには距離があり過ぎますし、そこまで強力な魔導書は持っていませんよ」

セネリオが心配そうな口調で言ったが、金の３ＤＳは心配ないと言ってきた。

金３ＤＳ「例え魔導書が無くとも、魔法は創れば良いのさ」

繋「魔法を・・・創る？それはどういうことです？」

セネリオ同様繋太も意味が分かっていなかったので、金の３ＤＳは説明を始めた。

金３ＤＳ「魔法とはね、詠唱次第でいくらでも変化するものなんだ、１００通りの詠唱で１００通りの魔法が生まれるのさ。その人の思いの強さや状況次第でね」

セネリオ「そ、そんなことがあるのですか？魔導書に書いていることだけが魔法ではないと」

セネリオはかなり動揺していた。自らの常識が覆されようとしているのだ。だが、金の３ＤＳは「しかし」と言葉をつなげた。

金３ＤＳ「魔法を生み出せるのはごく一部の強力な賢者ぐらいだ。時間と精神力が必要となるからね。確かに君はこの国一番の賢者かもしれないが今この場所で魔法を創り出すのは不可能に近い。だか

ら・・・俺の知っているある強力な術式を教える。魔法創造の話はまた今度な。」

そう言って金の３ＤＳはある詠唱文を表示させた。どうやらセネリオでも知らない詠唱らしい。繋太も隣からその術式の詠唱文を見た。しかし。

繋「まったく、そんな都合の良い術式があるのなら魔法創造の解説は後にしても良かったのに・・・・・・ってえええええええええええ！！」

繋太がこの世の終わりがきた様な叫び声を上げたので、セネリオは思わず飛び上がってしまった。そして落ち着いた繋太は恐る恐る金の３ＤＳにむかって質問をぶつけた。

繋「あの・・・これってファイアーエムブレムなのに他のゲームから取ってきていません？」

金３ＤＳ「ああ、取ってきた」

繋「即答かよ」

繋太が見たのは某ゲームの代表的な詠唱だった。ファイアーエムブレムの世界だろうが金の３ＤＳはあまり気にしていない。むしろ戦いを終わらせる方を優先しているようだ。

金３ＤＳ「他のゲームから取ってこようが別に良いだろう？ちゃんと技名は一部伏せるから。それに、この魔法じゃないとこの状況を打破できないぞ」

金の３ＤＳの言う通りの気がしてきたので、繋太は一つ溜息をつぃた後、思わず愚痴ってしまった。

繋「少しは自粛しろよ・・・」

繋太は文句を言いながらも、詠唱準備に入った。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

その頃同じくアイクたちも謎の部隊の存在に気づいていた

アイク「何だ・・・この部隊は・・・さっきの爆発を起こした奴の差し金のようだな」

アイクはあくまで冷静に呟いているが、内心かなり焦っていた。周知のことだがアイクは二つの大きな戦争を切り抜けてきた猛者（もさ）だ。敵を見る目には自信がある。だから分かるのだ。

アイク「このままでは三十分ともたん・・・！」

アイクが金の３ＤＳと相談しようとした瞬間、ちょうど良く通信が入った。

金３ＤＳ「焦るなアイク。今、奴らを駆逐するための準備をセネリオと昴大にやらせている。君たちはもうすぐ来るであろう奴からエリンシア女王を守ることを考えろ」

アイク「そうか、ところで奴とは何者だ。いかにも只者ではない言い方をしていたが」

金３ＤＳ「そのことなんだがアイク。頼みがある」

アイク「頼み？」

金３ＤＳがいかにも不安そうな言い方だったために、さすがのアイクでも少々心配になった。しかし、その頼みとは意外なものだった。

金３ＤＳ「悪いけど、奴との戦闘が始まったら俺を隠してくれないか？この金ピカボディーは目立つんだよ♪」

アイク「・・・そんな目立つ色にした方が悪いだろう」

金３ＤＳ「だってその方がカッコいいじゃないか！」

この言葉にその場にいる全員が呆れていた。

ただ二人を除いて

しい「（この独特の言い回し・・・的確な指示・・・そして３ＤＳ・・・まさか！・・・でも・・・そんなこと・・・あるわけないよ・・・だって・・・だって！）」

駿「（これまでの特徴からみて該当するのはただ一人・・・でも、そしたらこれまでやってきた事と大きく矛盾する！）」

金３ＤＳ「・・・すまん。ちょっと、ふざけすぎた。続けるぞ」

金の３ＤＳは既にふざけるのをやめていた。理由は簡単。しいと駿がただ事で無い顔をしていたからだ。どうも、金の３ＤＳはこの二人には弱かった。アイクたちはその理由をまだ知らない。事実を告げられるのはもう少し先の話だ。

金３ＤＳ「実際のところ、奴に俺の存在を知られるのはまずいんだ。俺が生きているのをまだ奴らは知らないからな」

アイクは金の３ＤＳに詳しく話を聞こうとしたその時。

ズガァァァァンと部屋のドアが爆発し、彼らを瓦礫が襲った。

一瞬時間が止まったかに思われた。

未だに土煙が立ちこめていた。

アイク「大丈夫か！みんな！」

アイクが全員の安否を確認しようと声をあげた」

昴「何とか・・・」
マルス「生きてる」
シーダ「みたい」
リリーナ「ですね」
ロイ「（・・・・・・・・・セリフがない・・・）」

しい「みなさん大丈夫ですか？」
エリンシア「みなさん、ご無事で何よりです。お怪我はありませんか？」
駿「エリンシア女王はしっかりとお守りしましたから大丈夫ですよ」

アイク「そうか、それは良かった・・・しかし、何で俺たち怪我一つしてないんだ？」

アイクは自らを含む全員の体に傷一つついていない事に驚いていた。同時に床に何かが落ちている事に気がついた。

アイク「これは・・・粉？」

アイクはこの粉の正体を知りたかったが、今はそれどころでは無いようだ。

昴「みんな！誰か来る。きっとあいつが言ってた奴だ！」

カラカラと瓦礫から立ち上がったアイクたちはエリンシアをかばうようにして後ろに下げた。

しい「爆弾をこのドアに直接設置されたのは迂闊（うかつ）でしたね」

？「そうだなぁ、ちゃんと廊下ぐらい確認しとけよ。兵士は弱ぇして拍子抜けだなぁ、女王様よぉ」

土煙が収まった頃。何やら派手な格好をした男が剣を肩に担いで入ってきた。男は妙な威圧感を放っていたが、昴大が最初にもった疑問は一つだった。

昴大は呼びかけるーーーーー！

昴「お前・・・一体なんの真似だ！！」

男は答えるただ一つーーーーー！

？「デーモン〇暮閣下の真似だーイカすだろ？この衣装！！」

全員「こんなやりとりで妙な演出を使うんじゃねえ！！」

怒られた

要するに男はヘビメタの格好をしていたのだ。それもデーモン〇暮閣下ばりの。

少し落ち着いた後、男は本題に入った。

？「私は親方様の命令でエリンシア女王暗殺の命を授かった。客人よ、怪我したくなかったらそこをどけ」

男の声は静かだしかし、圧倒的威圧感で体全体に電流が走っているようにピリピリしている。しかし、それでも動じてない男がいた。

アイク「断る。エリンシアはこの国に必要な人物だ。それでも殺そうと言うのなら・・・」

アイクは剣を男に向ける

アイク「俺があんたをここから退場させる」

男は鳩が豆鉄砲食らったかのようにポカーンとしていたが、しばらくするとケタケタが笑い始めたのでアイクは訝(いぶか)しんだ。

男「いやぁ悪い、今までに私にそんな口を聞いてきた奴はいないから驚いちまった」

男は未だに笑っているが、突然口調が真面目になった。

男「お前・・・面白いな。お前！名前は何だ！」

アイクは自信を持ってなおかつ落ち着いて言い放つ。

アイク「グレイル傭兵団団長アイクだ！」

男も自らの名前を明かす

男「私は神聖なる噺創造者(ティルズメーカー)の右腕、剣聖(ソードエスカトス)のディシジョンだ！

その刹那、二つの刃が交錯する

二人の戦いはまさしく一進一退の攻防と言うべきだろう。

素早い剣戟のディシジョンに対し力の強さと身のこなしで対抗するアイクの戦いは終わりがないように思えた。

しかし。

アイク「っっっっつあ！」

アイクが大きく弾き飛ばされた。決してアイクが剣の勝負で負けたわけではない。＞何か説明のつかない力＜で弾き飛ばされたのだ。ディシジョンはアイクにこう告げた。

ディシジョン「やるな。この私が本気を出しても互角とは。どうやらあの方から頂いたあの力を使わなければならないといけないな」

そう言って、ディシジョンは何やらブツブツと言い始めた。すると、リリーナが即座に反応した。

リリーナ「気をつけて！詠唱を行っているわ！」

ロイ「え、詠唱？そんなの魔導士とか司祭が魔法する時に使うんじゃない？何で剣士がそんな事を」

ロイ同様全員同じく想いだった。しかし、リリーナに意図は分から

ない。しかし、ディシジョンの詠唱は進む。

ディシジョン「我が手に属する剣よ。我に仇なす敵より、その力を削ぎ、我が力となせ！」

武器吸収！

そう言って男は剣を翳した。するとアイクたちの剣から光が漏れ出しディシジョンの剣に集まり出した。すると男はいきなり計算式を呟いた。

自分の鋼の剣＋鋼の剣×５＋鋼の槍＝９×６＋１０

＝６４

ディシジョン「よって今、私の剣の威力は６４だ！」

昴「な、何だと・・・６４！？まさか、こいつ、周りの武器からパワーを吸収して自分の武器を強化している？そ・・・そんなものに勝てるわけがない・・・」

アイクはこの時、金の３ＤＳが言っていた事を思い出していた。

（自分の持っていた武器が強力すぎて自分の受けるダメージが大きくなったらシャレにならないだろう？）

アイク「そういうことか・・・まずいな・・・！」

アイクは金の３ＤＳが言っていた事をすっかり忘れていたため武器を取り換えるのを忘れていた。そうこうしている内に武器吸収を済

ませたディシジョンが近づいてきた。

ディシジョン「これが私が親方様から頂いた力。武器吸収(ウェポンドレイン)だ。半径１０m以内にいる敵が装備している武器の力を吸収して自分の武器を強化するのだ。行くぞ！」

アイク「くっっっ！」

二つの刃が再び交錯するする。しかし、今回は先程と違い勝敗は明白だった。ディシジョンは剣で斬らなかった。

叩いたのだ。

アイク「うわっっ！」

威力６４の剣はアイクの鋼の剣を粉砕した。もはや剣と言うレベルではない。例えるならショットガンだ。

自らの得物を粉砕されたアイクが倒れているところを見てディシジョンはとどめを刺しにきた。彼は言う今までにわたしを本気にさせた者はいないと。そして叫ぶ。

ディシジョン「とどめだ！我が人生唯一の好敵手よ！」

全員「アイク！危ない！」

悲鳴が響くその刹那、アイクにディシジョンの大業物(おおわざもの)が振り下ろされた。

第九話～反則的力＝チート～（後書き）

次回、クリミア王城編完結です。

金の３ＤＳがセネリオと繋太に教えた。違うゲームから取ってきた魔法とは？

金の３ＤＳの正体は？

そして、アイクの運命は！

次回をお楽しみに。

既にアイクたちのメンバーが豪華ですから、敵も相当強く設定しています。

難易度的にアルティメットトールナティックといったところです。

これから出てくるてきも相当強いので、これからの展開を楽しみにしてください。

何だか段々ファイアーエムブレムぽく無くなってきてますね。

第十話～知らなければいけないこと～（前書き）

隙間時間に頑張りました。これで、クリミア王城編は完結です。

第十話～知らなければいけないこと～

激震とも言える地響きがアイクたちの部屋を襲っていた。

黒幕の手先ディシジョンの武器吸収（ウェポンドレイン）によってショットガン並にまで威力を増幅した鋼の剣が床に叩きつけられた音だった。

叩き潰すべく振るわれた大業物（おおわざもの）を身動きができないアイクが避けられるはずもなく。アイクは木っ端微塵になり、無残な姿が現れる。

はずだった。

ディシジョンが生死を確認するため、振り下ろした場所を確認する。しかし、床に穴が空いているだけで、死体らしき物は見当たらない。

ディシジョン「どういう事だ？あの状況で避けられるはずが・・・！」

ディシジョンがあたりを見渡すと３ｍほど右にアイクは倒れていた。命中はしてないようだ。

ディシジョン「・・・目測を誤ったか？・・・まあいい、次で決める！」

ディシジョンは再び大業物(おおわざもの)を振り上げる。今度こそ、圧倒的破壊力で滅するために。

しかし。

ディシジョン「何！？」

ディシジョンには床を砕く感触しかしなかった。再びあたりを見渡すと今度は後ろに３ｍほど離れた地点に倒れていた。

ディシジョン「どういう事だ・・・一体！」

ディシジョンもこの状況に訝(いぶか)しんでいたがある事に気づく。

この部屋にいるのは私とアイクだけでは無い！

ディシジョンはアイクに集中している時から、他にも客がいた事を留意していなかった。ディシジョンはすかさず昴大たちに振り返り、自分の目で見定める。そして、ある人物に目が留まる。

ディシジョン「お前か？この不可解な現象を起こしたのは」

ディシジョンが目を付けた人物。それは。

しい「あれ？ばれちゃった？流石に剣聖（ソードエスカトス）だけあって、目は良いのね」

駿以外の全員があっけに取られている中、しいはゆっくりと立ち上がり、こう告げた。

しい「学園都市に十人しかいない超能力者（ｌｅｖｅｌ５）の第四位の異空移動（スペースポーター）を舐めないでよ！」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

同じ頃の繋太とセネリオは詠唱の意味や想いの読解が完了していた。本来自分たちのものではない術式なので、セネリオは理解するのに苦労したようだ。

セネリオ「多少難解でしたが・・・いつでもいけます」

繋「こっちも準備完了だ！いつでも・・・いける！」

そんな中で一番焦っているのは他でもない金の３ＤＳだ。彼にはアイクたちの状況が刻一刻と伝わってくるので、事態の深刻さは誰よ

りも把握していた。しかし、彼にも驚かされた事があったようで。

金３ＤＳ「しいが・・・超能力者？いつの間にそんな力を・・・異（スペ）空移動（ースポーター）ってまさか！・・・しかし、そうだとしても奴に刃は届かない・・・！急がなければ！」

そして、金３ＤＳの催促により、彼らの詠唱が始まる。

繋＆ａｍｐ；セネリオ「天光（てんこう）満つるところ我はあり、黄泉（よみ）の門開くところ汝（なんじ）あり」

繋太とセネリオは詠唱より伝わる想いを形にして自らに刷り込んだ。彼らには見える。

繋＆ａｍｐ；セネリオ「出でよ！神の雷（いかずち）！」

圧倒的破壊力。それはみんなを守る力。敵を薙ぎ倒す力。それを振るう自分たちの姿が見える。

その力は最終的に昇華する

繋「これで最後だ！」セネリオ「これで最後です！」

みんなを導く力に。

繋&セネリオ「イン〇ィグネイション！」

眩しい閃光が放たれ、彼らの詠唱により作られた光の刃が謎の部隊に襲いかかった。

〜〜〜

しい「え！！？何で知ってるの・・・この世界にいる人が・・・」

しいは驚きのあまり固まっていた。一方でこうも言う。

ディシジョン「ずいぶんと厄介だ、負けはしないだろうが、時間はかかる。やはり、親方から渡された＞これ＜の出番か」

そう言うと、ゴソゴソと何かを取り出してきた。しいはその道具の名前を聞いた瞬間驚きから恐怖へと感情が移り変わった。

ディシジョン「きゃぱしてぃーだうんーけーたいがたー」

キャパシティダウン携帯型と素直に言えば良いものを、わざわざ言い方がドラえもん調。

それは何かと昴大は駿に聞こうとした。しかし、駿もしいほどではないが表情を曇らせていた。

無後の後、しいはそれを破壊すべくテレポートしようとした。が。

ディシジョン「遅い」

そう一言漏らしてスイッチを押した。

妙な音がし始めた。しかし、ただそれだけなので問題は無い。

だが、それは能力を持っていない者の話だ。

しい「あああ・・ううぅぁぁぁぁ！！！！！」

駿「がはぁぁぁぁ！あぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

アイク「しい！駿！大丈夫か？！」

学園都市出身のしいと駿が突如苦しみ始めた。無能力者には影響が無いが、能力者には悶絶するような苦しみを受けるらしい。アイクたちは二人を介抱しようとするが、そこにディシジョンが立ちふさがった。

ディシジョン「説明しよう。キャパシティダウンとは能力者の演算を阻害することで能力を一時的に使用困難にすることができるのだ。この携帯型はそれを小型化したものさ。親方様が作った対超能力者用のジョーカーだ。これで、お前たちの勝機は完全に失せた」

確かにもはやアイクたちに勝機など考えられなかった。そして、ディシジョンがあの大業物（おおわざもの）を振り上げ、誰もが絶望する。

ディシジョン「今度こそ、これで終わりだ、覚悟！」

ディシジョンがアイクたちを粉砕せんとした大業物（おおわざもの）を今にも振り下ろそうとした。

その時。

ズバーーーンと全てを劈(つんざ)くような轟音が響き渡った。あたりには閃光が放たれ、しばらく誰も動けなかった。そんな中でディシジョンはもぞもぞと立ち上がった。

ディシジョン「ハア・・・ハア・・・何なんだ今のは？確か外で凄い光と音が・・・げ・・・」

窓から外を覗いたディシジョンが見たのはほぼ壊滅状態の部隊だった。陽動のために派遣された部隊だったとはいえ、一発の雷で壊滅状態に追い込まれるなど全くの想定外だった。

ディシジョン「このままでは、クリミア兵がここに来る・・・それはまずい。せめて奴らの始末を、幸い、キャパシティダウンはまだこの手にゴフゥ・・・！」

ブツブツと呟いていたディシジョンの鳩尾(みぞおち)にしいの膝が入った。そのまま悶絶していたディシジョンだか、剣を握りしめて、しいを圧倒的破壊力で叩き潰す・・・つもりだったが無情にも剣は空を斬り床を砕いただけだった。

ディシジョン「こしゃくな・・・一体どうなってゴハァ・・・！」

状況を呑み込めてないディシジョンにしいのドロップキックが炸裂する。ディシジョンは５ｍほど吹っ飛ばされて壁に激突した。

ディシジョン「キャ、キャパシティダウンから解放されただと・・・！いったいどうして！」

しい「まだ、分かってないの？」

ディシジョンが未だに状況を呑み込めてないので、痺れを切らしてしいが種明かしにきた。キャパシティーダウンの影響は感じられずにピンピンしている

しい「あんたのキャパシティダウン携帯型の端末をよく見たらどう？」

ディシジョンは促されるままにキャパシティダウン携帯型の端末を取り出してみた。すると、端末から火花が散っていて、電源もつかなくなっていた。

ディシジョン「ま、まさか、先程の雷撃で電気回線がショート・・・！」

とディシジョンがぼやいている内にしいが端末を自分の元に引き寄せて踏み潰して破壊した。

しい「これで、キャパシティダウンはもう使えないわ、さて、どうする？」

ディシジョンは少し考えた後、「ここは男らしく・・・」と言い始めたので、何をするのか、全員心配になったが、続けたのはたった一言。

ディシジョン「相手に背中を向けて逃走！」

と言った瞬間、ものすごい速さで部屋を出て行ってしまった。彼らが思うのはただ一つ！

全員「全然、男らしくねぇ！」

１５分後

屋上から戻った繋太とセネリオと３ＤＳと合流し、傷の手当をしていた。ディシジョンとの乱戦の時に少し切ってしまったところもあった。アイクは傷の手当後、全員と話し合い始めた。

アイク「俺たちはどうやら、学園都市という存在をよく知らないといけないらしい。駿、しい、説明してくれるか？」

アイクはディシジョンの使った力は学園都市が関係しているということを見抜いていた。だからこそ、これからの戦いのために知っておくべきだと思ったのだ。

駿「それは構いませんけど・・・」

駿が口ごもったので、全員、不思議に思っていると、しいが言葉をつなげた。

しい「まずは、金の３ＤＳの正体を知るのが先ですよね？」

繋「あ・・・！」

全員、すっかり忘れていた。この完全なるイレギュラー的存在である金の３ＤＳを。全員が金の３ＤＳに向き直ったので、決心したようなそぶりを見せると、「落ち着いて聞いてくれ」と前置きしてから自分の名前を告げた。

金３ＤＳ「俺は執行代理人（エージェントリスト）だ」

第十話～知らなければいけないこと～（後書き）

魔法はテイルズネタでした。

次回はこの作品内の学園都市に関する特別編です。

コント入りです。

それでは次回をお楽しみに。

特別編ｃｈａｐｔｅｒ２～学園都市の設定・究極のお土産～（前書き）

今作品における学園都市の設定です。

コント　究極のお土産を収録。

特別編ｃｈａｐｔｅｒ２～学園都市の設定・究極のお土産～

学園都市

西東京を一気に開発して出来た科学の街。総人口の八割を学生が占めており、学校の街として有名。

都市外とは技術が二十年進んでいると言われていて、その技術力は半端では無い。

授業の一環として脳の開発が行われており、超能力の開発をしている。

基本的に各々の能力に目覚めているが、その内六割弱が無能力者（ｌｅｖｅｌ０）である。

作品中は原作の七年後という設定

学園都市内にいる生徒は必ず能力のレベルが存在している。以下の通り。

ｌｅｖｅｌ０　無能力者　六割弱がこれに当てはまる。決して全くないわけではないが所詮落ちこぼれという扱いを受ける。

ｌｅｖｅｌ１　低能力者　多くの生徒が属し、スプーンを曲げる程度。

ｌｅｖｅｌ２　異能力者　ｌｅｖｅｌ１と同じく日時ではあまり役に立たない。

ｌｅｖｅｌ３　強能力者　日常で便利だと感じられる程度。能力的にはエリート扱いされ始める。

level4　大能力者　軍隊で戦術的価値を得られるほどの力。

level5　超能力者　学園都市で十人しかいない（しい談）。一人で軍隊と対等に戦える力。

level6　絶対能力者　未だにたどり着いたものがいない。

学園都市の学生は奨学金や補助金で生活していることが多い。能力のレベルが高くなる程、支給額が多くなるので、高能力者になる程、金には困らない。

学園都市内の学校に入学すると原則、都市内に住居を持つことになる。それを利用して、子供を寮に入れた途端に親が姿をくらます、置き去り（チャイルドエラー）という現象が問題となっている。

ちなみに、駿としいも置き去り（チャイルドエラー）であり、困っていたところを執行代理人（エージェントリスト）に保護され、一緒に生活していた。

学園都市のトップは統括理事長のアレイスター＝クロウリーで運営は十二人の学園都市統括理事会で行われるが、アレイスターは既に七年の間に原作の主人公と仲間たちによって倒されたことになっている。

ちなみに、アレイスター討伐の際に駿としいは戦力として参加している。

～～～

駿「遠回し以前に褒めてねえ！しかも自分で天然自覚してるのか？」

しい「駿兄がいつも私のこと天然天然って言ってるじゃん。そのせいで私はだんだん天然に・・・」

駿「ねえ、それって俺のせい？本当に俺のせいなのか？何か段々としいのペースに乗せられてきたような気がする・・」

しい「まあそれは良いとして、早く食べよう！」

駿「あ・ああ・・（しいに丸め込まれた気がするけど、まあ良いや）」

アイク「何だそれは、饅頭か？」

しい「あ、アイクさん良い所に。これを食べてください」

アイク「ほう、どれどれ・・・うん、これは・・・良い・・・っ！」

駿「あ、アイクさん！水も一緒に飲んで！・・・しまった！一個目を普通に食べると・・・」

しい「そ、そうだった！駿兄どうしよう！」

アイク「・・・？どうしたんだ二人とも？水と一緒に飲まないと何かまずいことでも・・・かぁ！」

昴「ちょっと待って！アイクさん苦しみ出してるよ？！まさか、饅頭に毒でも！」

しい「違うの。あれはあの饅頭の副作用」

繋「饅頭の副作用？薬じゃあるまいしそんなこと・・・・・ってええええええええ！！」

アイクの髪が金色に点滅している

昴「その饅頭の副作用って！？」

駿「一定時間力が増幅して、潜在能力が開花する・・・と説明書に書いてあるが実際のところ、何が起こるかわからない」

アイク「んんんんん、んんんんんん、んんんんんんんんんんんんんんんんんんんん！！！！！」

繋「あ、アイクさん！しっかりしてくださいって、うわあ！服があ！」

アイクの上半身の服が弾け飛ぶ

しい「うわあ！凄い肉体美！勘当しちゃう！」

駿「そこ感動している場合じゃないし、漢字が違う！」

昴「そ、そうだよ！なんか黄緑っぽいオーラが出てるし、これってもうアレだよね！」

金色の逆立った髪、筋肉隆々、加えて黄緑っぽいオーラ。総合的に踏まえてこれは

繋「伝説の・・・スーパー○イヤ人・・・・！」

昴「なんで饅頭食ってスーパー○イヤ人になるんだよ！？」

駿「そんなの作った奴に聞いてくれ！」

ミスト「お兄ちゃん♪お茶いれたよ・・・・って！？キャャャャャャ！！お兄ちゃんの変態！！」バタッ

しい「あーあ、ミストちゃんが美しい肉体美に酔いしれて卒倒しちゃった」

駿「い、いや違うぞ！絶対に違うと思うぞ！」

アイク「気が高まる・・・溢れる・・・」

繋「何かもう変なこと言い出した！早く逃げよう！」

アイク「逃げられると思っているのか」

駿「何かもう見境なくなってる！早く砦から逃げろー！」

全員、砦の外に向かって走り出す

昴「饅頭の副作用っていつまで続くんだ？」

駿「多分・・・あと１０分ってところかな？」

繋「じゃあ、１０分耐えれば何とか・・・って！アイクが飛んできた！」

アイク「どうして俺の前に立った。敵として対した相手に容赦はせん。悪いが・・・あんたはここまでだ」

昴「いやいや、あんたからこっちに向かって来たんでしょうが！」

繋「聞く耳持ってないね、さすがスーパー〇イヤ人」

アイク「くらうがいい、か～～～～～め～～～～～は～～～～～め～～～～～破！」ビュンッ

アイクの剣が地面に突き刺さる。剣は大きくそれたが、刺さった周辺５ｍは爆風に包まれた

駿「かめはめ破になってねえ！ただ単に剣投げただけだろ！」

昴「でも威力的に冗談にならないよ」

繋「くそ、何でこうなった！？」

しい「この学園都市の究極のお土産＞はびこるなつやすみ＜の副作用のせいだよ。覚えといてね♪」

駿「やっぱりいろんな意味で究極のお土産だったな！」

昴「学園都市って恐ろしい！」

アイク「はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

そうこうしている内にアイクは気を高めている

繋「みんな！こうなったら言うことは一つだよね！？」

昴「ああ、分かってるよ！それ以外に言いようがねえ！」

彼らが思うのはただ一つ

全員「何でこーなるの！」

特別編ｃｈａｐｔｅｒ２～学園都市の設定・究極のお土産～（後書き）

まさかのアイクスーパー〇イヤ人化。ネタ仕上げるのに時間かかりました。

次回から学園都市編がスタートします。

執行代理人（エージェントリスト）の真意。

黒幕の正体が明らかになる。

次回をお楽しみに。

第十一話～もう一人の自分～（前書き）

中間考査が終わったんで投稿します。これからは勉強に本腰入れないとまずいので、更新ペースはいきなり遅くなったりすることがありますが、気長に見ていただけると幸いです。
学園都市編のスタートです

第十一話～もう一人の自分～

昴「ここが学園都市か、噂には聞いていたけどすごい所だな」

繋「ホントホント、何十年未来に来たんだって思っちゃうよね」

しい「そりゃ私たちの街＞学園都市＜は他の街とは比べ物にならないぐらい発展してるよ。あとで案内してあげる！」

彼らがいるのは学園都市。地球一の科学の街であり、駿としいの故郷とも言える場所だ。今ここにいるのは。

昴大、繋太、しい、駿、執行代理人（３ＤＳ）である。

なぜ彼らは学園都市に来ているのか。それを知るには少し時間を遡る必要がある。

～～～

アイクがまるで最初から分かっていたような口ぶりなので、昴大は狼狽えてしまった。だがそれだけではない。しいも駿も既に分かっていたようだった。

マルス「僕たちは君から聞かなきゃならないことがあるんけど」

シーダ「もちろん答えてくれますよね？」

執行代理人「もちろんだ、だがその前に・・・・・駿、しい！学園都市についてアイクたちに説明してくれ。その方が分かりやすい」

しい「分かった！！それじゃあ駿兄、いつものいくよ！」

駿「了解！」

その他全員「・・・いつもの？？」

しいと駿が何かを始めようとしているので、全員期待して待っていた。すると。

しい＆ａｍｐ；駿「「しいと駿の学園都市講座！」」

その他全員「・・・・・・・・・・・・」

二人は執行代理人（エージェントリスト）の求めに応じると、急にテンションが上がり出した。彼の言うには昔やってた、おままごとの名残（なごり）らしい。

しい「簡単に言うと学園都市は学校の街！！！人口の八割が何らかの教育機関に所属しているの！！！それだけじゃないわよ！！みん

な幸せ！！みんな仲間！！」

繋「ちょいと待て。今のセリフの中に某ゲームのセリフが入ってたような気が・・・！」

しい「チッ！うるさい殺すわよ！！」

繋「・・・・・・シュン」

しいの普段吐かない暴言に沈んでいると、執行代理人（エージェントリスト）が慰めるような口調で話しかけてきた。

執行代理人「すまん、特にしいはあのペースになると普段の天然が消えて人の話を聞かなくなるんだ。気にしないでくれ」

繋「誰に似たんですか？」

執行代理人「・・・たぶん、駿だろうな。もしくは親に・・・しかも駿より数倍たちが悪い」

繋「血は争えないですね」

執行代理人「だな」

執行代理人が肯定したのとほぼ同時に、繋太は肩を落とした。執行代理人もこの事については諦めているようであるはずのない肩を落とす。ため息混じりの二人をあざ笑うかの様に空は今日も晴れ渡っていた。

以下省略！

三時間後

駿「・・・というわけです！」

セネリオ「なるほど、それが学園都市ですか」

アイク「・・・？分かったのかセネリオ」

セネリオ「ええ、何とか。」

ロイ「何だか随分とスケールの大きなことぐらいは分かったかな」

リリーナ「ロイには聞いてないと思うんだけど」

ロイ「・・・・・・」

彼らは暴走気味のしいと駿からハイテンションな説明を受けていた。
説明は延々と続き、いつ終わるか知れぬ無限回廊と化していたが誰

一人として文句を言わず、説明を聞いていた。

アイク「人口の八割が学生とはすごいところだな、俺なんかまともに勉強したことあまりないぞ」

セネリオ「アイク・・・それは堂々ということじゃないですよ」

彼らは学園都市の話に食いつくように聞いていた。特に能力開発については、しいの力を目の当たりにしたため、全員聞きたい事だらけらしい。まさしく蜂の巣をつついたがごとく質問が飛び交った。

？「能力発動の仕組みってどうなってるの？」

しい「うーん、説明するのは難しいかな。専門用語が乱立するから理解できないと思うよ」

？「異空移動（スペースポーター）って瞬間移動みたいなもの？」

しい「まあ、そんなとこかな。少し意味合いが異なるけど」

？「学園都市の名物といえば？」

しい「それはもちろん＞はびこるなつやすみ＜！」

？「学園都市の名所は？」

しい「うーん、街自体が名所の様なものだからね、どこと言われても・・・」

あれ？

既にお気づきだろか？何時の間にか能力に関しての説明ではなくなっているのだ。ここまではまだよかっただろう。歯車の狂い出した質問攻めはさらにエスカレートする。

？「学園都市でよく行く娯楽施設は？」

しい「やっぱ、遊園地かな♪昔お兄ちゃんにつれてってもらったの」

？「好みの男性のタイプは？」

しい「えー、それはもう・・・秘密！」

すでに手遅れなくらい脱線してしまった論題だが、それを不自然なくらいに黙って見つめていた駿は、ある事に気づいた。

途中から一人しか質問をしていない。それだけでない、その人物がしゃべる言葉が濁流のごとき勢いなので、別の質問をしたい周りの人間は口を開けずにいた。

駿「なるほどね」

沸々と湧き上がってきた静かな怒りに身を任せて駿はその人物のもとへ近づく。本来ならしいが突っ込む事で、笑って終われるのだが、あの天然娘は論題がすり替わっている事に違和感を感じていない様だ。

どうやらあの不貞の輩には自分が誅伐を下さなければならない様だ。そう思いながら駿はニヤリと笑い、自らの武器である粉が入った袋におもむろにで伸ばした。

ツカツカとその人物の後ろに立ち、粉少々を空中に撒きそして念じる。粉は次第に集まり一つの球体となった。そして駿は余計な口が回りまくっている不届き者に誅伐を下す。

駿「粉塵砕破（エアダッシャー）！」

昴「ギャアー！！！！！！」

空気がうねる様な音が響き昴大（不届き者）は部屋の端まで飛ばされ壁に叩きつけられた。
ただ単に粉の球体が背中にぶつかっただけなのだが、威力は半端では無かったようで、昴大は壁でピクピク痙攣している。駿はその昴大に向かって微笑みながら声をかけた。

駿「出しゃばるんじゃない」

駿の威圧感に昴大はただ首肯するしか無かった。考えれば簡単だが、駿は学園都市第四位のしいの兄だ。同じ血筋の彼が強い能力を持っていないと誰が断定できよう。その圧倒的威圧感に気圧される一同だったが、流れを変えるためにしいは本題に移った。

しい「お兄ちゃん・・・そろそろ教えてくれない？一体何があったの？」

執行代理人「ああ分かった」

執行代理人（エージェントリスト）は意を決した様に息を吐いた。彼らは分かっていないのだ。敵の強大さと不可解な謎を。

執行代理人「全てを話そう」

〜〜〜

所に立ち寄ったんだ」

しい「ある場所って？」

執行代理人「窓の無いビルさ」

しい＆ａｍｐ；駿「「・・・！！！！！！」」

昴「窓の無いビル？何それ」

あまりに不可解な単語だったので、全員眉を顰（ひそ）めていた。答えたのは駿。

駿「ついこの前まであった。学園都市の中枢と言える場所です。学園都市理事長アレイスター＝クロウリーがかつていた場所でもあります」

アイク「アレイスター＝クロウリー？誰だそれは」

駿「学園都市の全てを掌握していた奴です。全ての黒幕と言った方がいいでしょう」

アイク「ふむ、それでそいつのいた建物に立ち寄って何があったんだ」

アイクは答えを求めて執行代理人（エージェントリスト）の方を向く。しかし返ってきたのは意外な返事だった。

執行代理人「ＷＡ☆ＫＡ☆ＲＡ☆Ｎ！」

繋「おい！？そりゃないでしょう！ところで何、その☆は！？」

執行代理人「いやー、強調してみた」

繋「そんな演出要りません！早く続けてください！」

執行代理人（エージェントリスト）が「せっかちな奴だ」と漏らしていたが、話すべき事はまだある。続けるのだ。

執行代理人「俺はそれから＞何か＜に身体を次第に支配される様になった。自我はだんだん薄れていったよ」

執行代理人「そしてある日、俺は俺でなくなった。身体は奴のモノになった。だから俺は自分の意識をこの中に封じ込めた。それが今の姿だ」

しい「お兄ちゃん・・・だからそんな姿に、あの時様子がおかしかったのはそのせいだったのね」

セネリオ「それで、あなたの身体を奪い去ったのは一体何なのですか」

執行代理人「ああ、それならだいたい検討はついている。ちと厄介な奴だ」

駿「その人物は誰なの・・・？」

執行代理人（エージェントリスト）は自信満々にこう言い放った。誰もがその言葉に驚かさ

れる事になる。

執行代理人「たぶん、俺自身じゃないかな？」

全員「・・・・・・は？」

予想外の言葉に全員それを聞くと同時に固まった。普段の彼らからは想像もつかないアホ面だっただろう。あとで自分がどの様な顔をしていたか確かめたくもなるが、人間は不便なモノで鏡などがなければ自分の顔すら拝めないのだから口惜しい。

マルス「どういうこと？」

執行代理人「正確に言えば俺の暗黒面（ダークサイド）だな。だからあいつは俺なんだよ」

アイク「何だその暗黒面（ダークサイド）ってのは、美味いのか？」

執行代理人「・・・いや食い物じゃなくてね、妬（ねた）み・憎（にく）しみ・嫉妬（しっと）。そういう人の心の悪い側面だ。誰にだってあるんだ、聖職者だろう

が例外じゃない。それが浮き出て来て実体化したんだと思う」

昴「心の悪い側面が実体化して肉体を乗っ取る？そんなことがあり得るの？」

全員同意見の様だ。心が肉体を乗っ取るなんてことは聞いたことがない。あり得ないことなのだ。しかし続けて執行代理人（エージェントリスト）はこう付け加えた。

執行代理人「もちろん、自然にそんな現象が起こるなど考えられない。だから俺の記憶が飛んでいるのは、その時何かをされたからなんだと思うんだ」

しいと駿の顔が歪む。その何かが起きたせいで兄がこんなことになってしまったんだとすれば、その何かをした人物は一人しか浮かばない。

駿「きっとアレイスターが何かをしたんじゃないのかな？」

執行代理人「俺もそう思う。まして記憶が飛んでいるのは窓の無いビルに行った時だからな」

それならとしいが言葉をつなぐ。

しい「学園都市に戻ってみれば何かが分かるかもね」

駿「そうだな、報告がてら一度戻ってみるか！」

ロイ「だったら僕たちも・・・」

ロイがそう声をあげた時、すっかり忘れられていた存在が久々に顔を出した。

エリンシア「・・・あの皆さん」

アイク「あ、そういえばエリンシアもいたんだっけな、すっかり忘れてた」

エリンシア「忘れないでくださいよ、ところで今連絡があったんですが、最近変わったことが起きているそうで」

アイク「ん？どんなことだ？」

エリンシア「ベグニオン帝国のあの塔から幾つかの光が出て四方八方に飛び去っていったらしいです」

セネリオ「！・・・ちょっと待ってください。もしかしてその塔って・・・！！」

エリンシア「はい、かつて女神アスタルテを倒したあの塔です」

アイク＆ａｍｐ；セネリオ「「・・・！！！！！」

アイクとセネリオがただならぬ表情になる。数ヶ月前、アイクたちはその塔で人を滅ぼそうとした女神アスタルテを討ったのだ、彼らはその時のことを片時も忘れてはいない。

エリンシア「その一つがこのクリミアにも飛来しまして。今は飛来した村で保管しているとのことです。そこでアイク様、お願いがあ

ります」

アイク「お願い？」

エリンシア「はい、グレイル傭兵団にその飛来物をここまで運んでいただきたいのです」

アイク「無理だ」

セネリオ「・・・・・え？ちょっとアイク！」

セネリオにも即答は予想外だったらしく。珍しく慌てている。アイクはその表情を珍しそうに見た後、エリンシアに理由を告げる。

アイク「俺たち傭兵団は今現在復興に関する依頼で手一杯だ。出張するには時間も人手も足りない」

エリンシアはそれを聞いて「それでは仕方ありませんね」と残念がっていたが、アイクは「だか・・・」と続けた。

アイク「だが傭兵団じゃなくて、俺たちへの以来なら何とかできるぞ」

エリンシア「え・・・！」

アイク「今回の依頼は俺たちの今のパーティーにも無関係ではないと思う。だから、俺たちへの依頼なら受けることはできる」

アイクが同意を求める様に全員に振り向いた。全員、アイクの顔を見るなり首を縦に振った。アイクは満足した様にエリンシアに振り

返る。

アイク「ということなんだが、良いか？」

エリンシア「は、はい！お願いします」

こうして話がまとまり執行代理人（エージェントリスト）はこれからについての総括を話し始めた。

執行代理人「よし、じゃあこれからについてだが、まず、二手に別れよう。一方は学園都市に行く班。もう一方はその村へ飛来物を取りに行く班だ」

執行代理人によって班決めが成された。それは以下の通りである。

学園都市班

昴大、繋太、しい、駿、執行代理人

飛来物回収班

アイク、セネリオ、マルス、シーダ、ロイ、リリーナ

執行代理人「こんなところだろうな、学園都市班は同じ世界出身の方が状況を判断しやすそうだからこうなった」

執行代理人「飛来物回収班はもっぱら戦闘向けのメンツだ。それにアイクたちの方が地理的にも熟知してそうだからな。こうなったが異論は無いか？」

全員首を縦に振る。異論はなさそうだ。そこでふと繋太が疑問を口走った。

繋「ところでさ、どうやって学園都市に行くわけ？」

しい「簡単だよ、こうするの」

しいはそう言うと手を前に掲げる。すると何やら黒くてモヤモヤした空間が現れた。

繋「うわ！何これ！？」

しい「＞異空の回廊＜よ。これで世界を行き来するの。もういつでも行けるよ」

空間移動の準備が整ったので執行代理人が最後の説明をする。

執行代理人「こちら側と連絡を取りたい時は３ＤＳを使ってくれ。それで交信が可能だ。それじゃあしばしの別れになるが、幸運をな」

アイク「・・・フフ、あんたたちもな」

アイクは笑いながらも再会を願いながらしばしの別れを告げた。すると昴大は何かを決意したようにアイクに近づいた。

昴「あのアイクさん、学園都市から戻ったら、剣を教えてくれませんか？」

アイク「ん？別にいいが」

昴「あ、ありがとうございます！じゃあ楽しみにしてますね」

それを見て繋太もセネリオの元へ向かった。

繋「あの、僕も学園都市から戻ったら魔導を教えてくれませんか」

セネリオ「ええ、構いません。待ってます」

繋太の才能を信じているセネリオは快く承諾した。もはや事実上の師弟関係だ。

駿「よし、異空の回廊に入ってくれ、そこを抜ければ学園都市だ」

昴大と繋太は異空の回廊の前に立った。この先に見たことの無い光景が広がっているのだ、だか二人に迷いは無い。ゆっくりと歩き出し回廊の中に入る。

すると身体中がかき乱される様な感覚に陥った。もはや上も下も分からなくなっていた。いや、それ以前に上も下もあるのかすら分からない。もはや聞こえないかもしれないが、彼らはそれぞれ考えている相手に向かって必死に言葉を紡いだ。

昴＆ａｍｐ；繋「「また会いましょう、特訓楽しみにしてますから」」

二人の意識はそこで途切れた。

かくして物語は学園都市に移る。それぞれと約束を交わした兄弟はそれを果たすがために次の舞台に急ぐ。

本来会うはずがなかった彼らが作り始めた絆はさらなる物語を創り出すこととなる。

彼らは知らない。これが新たな苦難の始まりであることを。

そして、彼らが陥る最大の危機に遭遇することを。

第十一話～もう一人の自分～（後書き）

次回、昴大たちは学園都市の中枢へ向かう。そこで知る新たな事実。
そして、予想外の事態に陥る！

次回をお楽しみに

更新は不定期ですご了承ください

断章～過去・意思・孤立～（前書き）

お久しぶりです。期末試験も終わり、落ち着いてきたので投稿します。
今回はシリアスっぽい要素をいれてみましたのでお楽しみいただければ幸いです。
それでは断章をお楽しみください。

断章～過去・意思・孤立～

しい「二人とも、はいジュース」

昂&繋「おっと・・・ありがとう」

公園のベンチで休憩していた昂大と繋太にしいがジュースを投げ渡す。二人ともありがとうとお礼を言いながらキャッチしパッケージを確認する。
それは学園都市産の極めて前衛的なもので実験的な意味合いを兼ねているものが多い。
よってありえないような商品も多い。しかし二人はそれとはまた違う意味で恐怖に怯えることになった。

昂「これは・・・」

繋「・・・『はびこるなつやすみ』ってちょっと待った!!」

しい「ん・何？」

しいはいたって普通でいつものほんわかとしたオーラを纏ったままだが、水淵兄弟には恐怖に怯えた記憶しかない。

繋「何じゃないよ、これ特別編でアイクが伝説のスーパー○イヤ人に変身して大変なことになったやつじゃん！（あの時はジュースじゃなくて饅頭だったけどね！）」

しい「ああ、そういえばそんなこともあったね！あの時のアイクの筋肉美凄かったよ」

繋「くっ！僕だってスーパー○イヤ人になれればあのくらい！」

しい「むりだよ、アイクと繋ちゃんじゃ元の筋肉量が違いすぎてるもん」

繋「・・・ちくしょう！！ちくしょう！！完全体に完全体になれさえすれば！！」

駿「お前はセ○か！・・・これでお終いにするよ！粉塵砕破（エアダッシャー）！」

繋「えっ、ちょ、おま！！ギャー！！！！！！！！！！」

駿「きたねぇ花火だ」

昴「・・・帰っていいかな俺」

あまりに論点がずれ過ぎているので耐えかねた駿がそこに一閃することにより事態は収束した。後で話を聞いたところ『はびこるなつやすみ』はドリンクにすることにより、アイクのような暴走状態になりにくいらしい。

昴「・・・それにしてもこの町はまるで未来都市みたいだ」

学園都市中枢に向けて歩いている彼らだが、昴大と繋太にとってこの町は見慣れないものが押し合いへし合い並んでいる。外部ではあり得ない様な情景も少なくない。
多くの学生が闊歩(かっぽ)するこの町で自分たちは場違いの人間、蚊帳の外だった。

無論、自分たちは学生だ。周りを歩いている学生も超能力の開発を受けている以外は自分と何ら変わらないはずだ。しかし、この都市で暮らしているかそうで無いかはほんの些事(さじ)にすぎない。自分たち、いや、自分はこの町にいてはいけない。罪悪感じみたそんな思いが昴大の中で血流のように駆け巡っていた。

昴「うっ・・・？」

体中に巡る感覚に耐えられなくなった昴大はそのまま気を失ってしまった。

昴大はなぜ自分がそんな感情を抱いているのかは分からなかった。
自分は初めてこの都市に来た。

こんな建物は知らない・・・。

こんな施設は知らない・・。

こんな公園は知らない・。

こんな学校は知らない。

こんな都市は知らない！

こんな気持ちは知らない！！

・・・・・本当にそうか？

本当に初めてここに来たのか？

オモイダセヨ・・・

オマエハココデタクサンノヒトヲキズツケテニゲカエッテイッタヒキョウモノダ！！ナゼモドッテキタ！！！

「何で戻って来たの？早く私の目の前から消えてよ。卑怯者」

「お前なんかあの時死んでしまえばよかったんだ！何で生きてるんだよ！消えろ！」

「なぜあなたがここにいるのか、私の知ったことではありません。ただ、私は決してあなたを許しません」

名も知らない人たちが自分を罵倒してくる。

聞こえてくるのは自分に対する悪口雑言（あっこうぞうごん）だけだった。自分たちの罪に対する、彼らの嘲り、憤りが声として形になっている。

自分は許されない、絶対に許されない。

・・・だが、自分は何をした？

思い出せない、忘れてはいけないはずのことだ。でも何だ？

ソンナコトモワスレタノカ、ショセンオマエニハソノテイドデシカナカッタノカ！ダガワスレテイルノナラシカタガナイ、オシエテヤロウ。オマエハ・・・。

その瞬間昴大は現実に引き戻された。彼が何をやったのか分からなかった。

もしかしたら知らない方が幸せなのかもしれない。

いや、思い出さない方が幸せなのかもしれないーーー。

繋「兄さん！しっかりして！」

昴「はっ！！・・・ハァハァハァハァ」

しい「いったいどうしたの、昴ちゃん？」

駿「何かずいぶんと魘(うな)されてたみたいだけど、よく眠れたか？」

昴「眠れた・・・？」

あまり状況を理解できていない昴大だったが
すぐに、自分がベッドで寝ていることに気がついた。白を基調とした無機質な構造のベッド、要するに病院ベッドだ。

繋「いきなり倒れるからびっくりしたよ。体調でも悪かったわけ？」

昴「いや、・・・それよりここは？」

？「あら、どうやら目が覚めたらしいわね、気分はどうかしら」

昴大が場所を聞き出そうとすると、病室の外から誰かが入ってきた。
その人は昴大に優しげな目を向けながら。体調を気遣っていた。

昴「あの、ここは一体？」

その女性はセミロングの髪をパタパタさせながら微笑み、疑問に答えるべく口を開く。それは同時にここに来た目的を再確認することになる。

？「私は御坂美琴（みさかみこと）。学園都市統括理事の一人よ。話は聞いてるわ、ようこそ、元・窓のないビルへ」

御坂「あなた、何だか随分と暗い顔してるわね、何か悪い夢でも見た？」

昴「い・・・いや、」

核心をついたような御坂の言葉に昴大は否定の言葉を返すしかなかった。

昴「何でもない・・・何でもないんだ」

御坂「・・・・・・・・」

御坂はそれ以上追求しようとはしなかった。
誰にも話したく無いことの一つや二つはある。
ましてや昴大自身に分らないことに踏みいることなど、出来はしないのだから。

御坂「話はさっきしいから聞いたけど、随分と奇妙ね」

繋「奇妙？」

御坂「ちょっとあんた、不思議に思ってないの？この状況に」

御坂は今回の出来事て最も重要であり最も謎な部分をついた。

御坂「なんで、ただの一般人が突然ファイアーエムブレムの世界に飛ばされたのか疑問に思わなかった？」

繋「あっ・・・・・」

昴大と繋太は今までくぐり抜けてきたものは現実だと信じている。森での戦い、クリミア王城でのディシジョンとの死闘。全て克明に記憶している。

しかし

ファイアーエムブレムの世界に迷い込み、剣と魔法を使い敵を倒す。

そんな非現実的な出来事をまやかしでは無いと断言できるだろうか。

そもそも、自分たちは本当に異世界に行ったのだろうか？
自分たちは長い夢を見ているにすぎないのではないか。

自分は異世界に迷い込んでしまったなどと人に言ってみたとしよう。
ゲームやアニメの見過ぎだとか、
空想に耽(ふけ)る電波な子としか認識されず、一笑にふされるのがオチだ。

二人には今までのことが夢だとは到底思えなかった。
二人に答えが見つかるはずもなかった。

御坂「私はね、あなたにこれが現実かまやかしかの答えをあげられると思う」

昴「え？」

御坂は全てを見透かしたように話を続けた。

御坂「あなたは実際にアイクたちと会話したんでしょ？ゲームと何か違うところはなかった？」

繋「ゲームと違うところ・・・確かに少し違ったかもしれない。でも、何だろ？」

御坂「個性よ」

繋「個性？」

二人が首を傾げる

御坂「そう、彼らには元来(がんらい)、個性というものはないの。ゲームを作るにあたって、人が個性を肉付けしていったにすぎないわ」

二人は黙って話を聞いている。これが現実かまやかしか白黒つけなければ納得できない。

無意識に手に力がこもる。

御坂「ゲームクリエイターが行きついた最終形がゲームのキャラとして確定するの。でもあなたたちが出会った彼らはゲーム以上に個性が出てたんでしょう？」

二人は不意にアイクたちのことを思い出していた。確かに彼らはゲームとは少し違っていた。

セネリオは冗談じみたことを言っていた

ロイはいじられキャラとしての地位を確固たるものにしていた。

アイクも微妙に妙なことを言っていた。

だが、二人にはこのゲームとの差異が何を意味するのかは分らなかった。

御坂「あなたたちが迷い込んだ世界がオリジナルだとすると、ゲームはそれに限りなく近づけているだけなの。ゲームはその世界をアバウトに表現しているだけで１００％世界と同じになれないのよ」

つまりと御坂は続ける

御坂「オリジナルの世界とゲームが異なるということは、その世界

が実際に存在するという証拠になるのよ」

昴「・・・？？？？？？」

繋「あっ・・・なるほど！」

この話に対する二人の反応は全くをもって正反対だった。

昴大の頭には？がごった返してひしめき合っていた。

御坂「これは理解する必要はないわ結論だけ覚えていて」

少し息を吸ってから御坂は力強く言い切った。

御坂「あなたたちがアイクたちと一緒に戦った記憶は幻想なんかじゃない」

御坂の言葉を聞いて二人とも何やら吹っ切れた様子でお互いの顔を見合わせた。

二人が今までのことをまやかしじゃないかと思うその幻想が壊(こわ)された瞬間だった。

繋「でもそれって、僕たちがいた世界がオリジナルだっていう確証がないよね」

昴「あっ・・・」

抜けていた盲点に直面した昴大は間抜けな声を出してしまったが、御坂はそれに落ち着いて答えるだけのことを知っているらしい。

御坂「それについて心配はいらないわ、異世界の存在は既に判明しているから」

繋「えっ、それって科学的にですか？」

繋太が素っ頓狂な声を出し、身を乗り出すような体勢になりながらも、聞いてきた。それに対して御坂の返答は意外なものだった。

御坂「いいえ、魔術的に」

繋「ま、まじゅつ？」

御坂「ええ、なんだか知らないけどある人の持っている１０万３０００冊の魔道書とやらの一つに書いてあってね、特殊な霊装が必要とは言ってたけど」

昴「１０万３０００冊？霊装？」

魔術という科学的な事とは無縁のはずのオカルトじみた発言を学園都市統括理事の一人がしていることにひどく疑問を抱いたが、そこへしいが割って入った。

しい「御坂さん！二人に魔術のことが分かるわけないじゃないですか」

御坂「あ、ごめん」

しいの言い方からすると、魔術というものをしいは少なからず知っているようだ。聞きたいのは山々だが、そこへ、

？「よ～うミサやん元気にしてたかにゃー」

サングラスをかけてアロハシャツを着込んだ金髪の男が妙な言葉遣いで入ってきた。

御坂「ちょっと！今大事な話の途中なんだから邪魔しないでよ」

？「酷い言い草だにゃー、そんなことより見慣れないこの二人は誰ぜよ」

飄々とした男は昴大と繋太の方を見ながら、しっかりとした足取りで二人の間に割って入った。

御坂が呆れたように頭を掻いた。

御坂「今回の件で重要な位置にいる。

水淵　昴大君と繋太君よ」

それを聞いた途端男の顔がよく見ないと分らない程度に引きつった。ある程度の不測の事態には動揺しないように訓練を受けているようだが、隠しきれていなかった。

二人の名前はそれだけ彼の何かを刺激していた。

？「なるほど、ならば自己紹介するにゃ。俺は土御門元春（つちみかどもとはる）だ。二人ともよろしくにゃー」

昴「ど、どうも・・・」

土御門の特殊な言葉遣いに二人ともたじたじになっていたが、その時、すっかり忘れられていた存在が昴大のポケットから声を発した。

執行代理人（エージェントリスト）「二人とも気にする必要はないぞ。こいつはただのシスコン軍曹だそれ以上でもそれ以下でもない」

土御門「またまた酷い言い草だにゃ・・・って今言ったの誰にゃ」

土御門が一瞬で凍りついた。長らく聞いていなかった懐かしい声が響いたからだ。

土御門はゆっくりと視線を昴大の３ＤＳに下ろしたそして心当たりのある名前を呟く。

土御門「もしかして・・・柚（ゆず）やんか？」

執行代理人（エージェントリスト）「ああ、柚〇〇〇ただいま戻ったぜ」

しいはこの時初めて、慕っている兄の名前を知った。この時から、執行代理人（エージェントリスト）としいは本当の兄妹になったかもしれない。

土御門「なるほど、話は分かったぜ柚やん。つまり7年間の記憶がねぇと」

土御門は3DSに語りかけていた、傍(はた)から見ると変人に見えるかもしれない。

執行代理人(エージェントリスト)「ああ、それだけじゃない。何か重要な記憶も持っていかれてる」

執行代理人(エージェントリスト)は苦虫を噛み潰したような顔をしている（つもり）が土御門はというと、

土御門「別に思い出す必要も無いんじゃないかにゃー。執行代理人として生きてる時間はちゃんと覚えているんだろ？」

執行代理人はそうだと肯定する、しかし

執行代理人「俺は知りたいんだよ。なぜこんな事になったのか、なぜ俺が光(ホーリー)と闇(ダークサイド)に別れる事になったのか、それを確かめたい・・・！」

揺るぎない明確な意思。土御門はそれに触れた。

土御門「それがお前の意思か」

執行代理人は肯定の意思を示す。揺るぎない確固たる意思を。

土御門「分かったぜよ柚やん。俺もサポートできる事はさせてもらう」

執行代理人「そうか！ありがとう土御門！」

執行代理人は画面の中から精一杯のお礼をし、勢いでタッチペンが飛び出しそうになった。

土御門「礼には及ばないぜ柚やん。んじゃ、お前と通信できるようにしてくるからここらでちょいとお暇(いとま)させてもらうにゃー

土御門は彼らにまるで逃げるように部屋を後にした。

土御門「水淵　昴大か・・・。まさかまたこの名前を聞く事になるとはな」

土御門は部屋から出たあたりで思わず口走らざるを得なかった。

この言葉は土御門しか知り得ない。
仮に彼らが聞いていた所で理解は出来ないだろう。
昴大の過去。それは決して話してはならない。
しかし、一度口から漏らした言葉は戻らない。

絶対に戻らない。

御坂「それでこれからどうするの」

全員でこれからの事について話し合いを始めていた。中心人物はもちろん執行代理人。

執行代理人「アイクたちと合流しようと思う。女神の塔から出た飛来物の調査に協力しないといけないしね」

駿「だったら、もう行こうか。アイクたちを待たせるわけにはいかない」

駿はしいに目をやる。その意思を理解したしいは少し離れたところに『異空の廻廊』をだした。

執行代理人「準備が出来たら各々で入ってくれ」

繋「あっ、ちょっとウォータークローゼットに行ってくる」

昴「トイレに行くって普通に言えばいいだろう」

御尤(ごもっと)もな指摘に繋太は笑みを浮かべながらトイレへと向かった」

しかし、これが彼らの戦いを大きく左右する出来事になるとはまだ誰も思っていなかった。

繋「おーさっぱりした！早くみんなの所に行かないと」

繋太が元の場所に戻ってくると、そこには、しい一人だけが佇(たたず)み、すすり泣く音が聞こえた。

そして『異空の廻廊』は消えていた。

繋「しい？一体何があったの？みんなは？」

しい「・・・ちゃん」

繋「へ？」

しい「けいちゃぁぁぁぁぁん」

繋「うわぁわわ」

繋太が声をかけると涙で顔がくしゃくしゃになったしいが抱きついてきた。

男なら大変喜ぶべきなシチュエーションなのだが、今はそれどころではない。

繋「しい！落ち着いて、何があったの」

しい「お兄ちゃんたちは先に行った・・・」

しいが異空の廻廊に入るのは必ず最後だ、繋太を待ってくれていたのだ。

しい「グスン・・・私・・・」

そして繋太に身も凍る様な事実を告げる。

しい「世界間の移動ができなくなっちゃった・・・もうお兄ちゃんたちは帰って来れない・・・！」

こうしてしいと繋太は学園都市に残された。

こうして一つの物語が終わり、新たな物語が始動する。

噺(はなし)はどこに転ぶか分からない。

はたしてこの物語の果ては

ｇｏｏｄ　？

ｏｒ

……？

ファイアーエムブレム～時空の絆～

Ｆｉｒｓｔ　Ｃｈａｐｔｅｒ断章

断章～過去・意思・孤立～（後書き）

ついにとある魔術の禁書目録の原作キャラが登場です。これからもお願いします。
今の書き方に限界を感じてきたので、一旦ここで本編を切ることにします。
あと二話ほど続けます。

取り残されたしいと繋太
帰れなくなった昴大たち
飛来物を追うアイクたち
それぞれの思いが交錯するとき
物語は始まる。

ファイアーエムブレム～時空の絆～
Ｓｅｃｏｎｄ　Ｃｈａｐｔｅｒ
２０１２年１月１日午前０時投稿予定

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7370u/

ファイアーエムブレム～時空の絆～

2011年12月17日05時49分発行